

出藍文庫

11-1

東方はじめて合同「春雷」

近藤 貴弥 編



出藍文庫



# 目次

children 紅の箒	五
如月 後戻りできない希望に溢れた未来	三五
七曜主醬 はじめての自費出版	五五
荻窪ミナミ 蓮子の恋心の行き先は	六一
霜月レイ 幻想から始まるラジオ	八一
あらざり はじめてのお酒	一〇三
近藤貴弥 春雷	一三三
後書き (近藤貴弥)	一四六



children

紅の筥

## 一、発見

「フンフーンフンフン♪フンフーンフンフン♪」

深い森の中に鼻歌が響く。

幻想郷の深い森、それは魑魅魍魎の跋扈する危険な場所。そんな場所に似合わない明るい歌声。獣道を歩く鼻歌の主は煌めく金髪を持つ魔女。いや魔女というか魔法使いというべきか。

我が道を征くというふうな歩調でズンズンと魔法の森の奥地へ進んでいく彼女はどこか楽しげである。

二十分くらい歩いたところだろうか、彼女は湖にたどり着いた。

彼女は少し周りを見渡すと霧の出ている湖畔に隣接した小屋に目をつけ、そこまで歩いて行こうと数歩踏み出したところで足を止めた。

「なんだあれ？」

その小屋から少し離れた湖上に赤い何かが浮かんでいた。

船のようだが横向きに長い板が横たわり、その上には丸い大きなものが鎮座していた。

その風貌は明らかに自然の産物ではなかった。

「昨日は無かった……よな？」

少し考えた彼女【霧雨魔理沙】は何かの罨かとも思ったが、その存在は恐怖よりも好奇心を刺激するのに十分な異質さを備えていた。

「何かは知らんが、怪しい物は調べるに限るぜ！」

小屋まで歩いて、その場にあつたボートを用いて物体に近づいていく。

赤いそれは波に揺られながらも動くことなく魔理沙はすぐに物体に触れることができた。

それはやはり船のようだったが、普通のそれとは全く異なっていた。

形状は丸太船に近いが、真ん中あたりに側面に張り出た長い板が固定されており、その上には大きい何かが載っていて、所々に板が取り付けられていた。丸太の長い板の下には人一人が入れるくらいの穴が開いていて、中は硬い座席になっていたので魔理沙は入ってみることに

にした。

中から見てみるがオール類はなく、おそらく舵を取るための棒と何かを操作するためのレバーが左に、足元には端に鎧のようなものがついた棒が横たわって、用途不明の金具が多数取り付けてあった。

「これ……なんだっけか？」

ふと、魔理沙はこの機械に見覚えがあるような気がした。

確か小屋に放置されてた本の中に似たような絵が……

「……とりあえず岸にあげるか」

彼女は小屋の付近までボートで物体を持っていき、湖畔にロープで軽く固定した後、小屋の本棚に置いてあった冊子を取り出した。

「確かここに……あつた！」

魔理沙が見つけた比較的新しいように見える設計図をまとめた冊子には物体の詳細な説明と図解が書いてあった。



「飛行艇……つていうんだな。ただの船じゃないのか？」

魔理沙は冊子を片手に赤い物体【サボイアS.S.I】に近づいていった。

一、飛翔

とりあえず動くかどうか。

冊子に書いてあることを頼りに各部をチェックしていく。

（板は結構大きいけど中身はシンプルだな……歪みもない、新品みたいだぜ）

冊子と実物を見比べながら、飛行艇に関する知識を得ていく。

もともと機械に関して関心のあつた彼女は飛行艇を前にして少し興奮気味であつた。

主翼フラップや尾翼フラップ、燃料タンク、機体表面の損傷状況、その他諸々を見て異常なしと判断した彼女は最後に長い板【主翼】の上にあつた物体【エンジン】を確認するためにカバーを開けた。

内部には鉄でできた複雑な構造を持つであろう機械があつた。

（こいつは……なんだ……全くわかんねえ）

エンジンを初めて見た魔理沙は当然内部の構造などわかるはずもなかったので、表面がきれいなことを確認して異常なしとした。

内部で石炭よりも爆発力のある液体が連続で燃えていくということを彼女はしらなかつた。

各部のチェックを済ませ、動作に問題なしと判断した魔理沙は早速機体の起動を始めた。まず機体の主翼の下に空いている穴【操縦席】に座った彼女は周りにある操作系を確認していく。

左にあるレバーはエンジン出力調整

足にある蹬は尾翼操作

その手前の金具はエンジン起動

中央の棒は主翼操作

前にある計測器は速度、高度、燃料残量

一通り見終わった魔理沙は椅子の下に曲がった鉄の棒と何度も使われた形跡のあるゴーグ

ルを見つける。

「なんだこれ？ えーつとまずこの棒は…つと、エンジン起動用のクランク棒？」

本で用途と使用方法を確認し、エンジン後部を見ると、確かに小さい穴が空いていた。

「これを入れて」*ぐぐ*

力を込めてクランク棒を差し込むと、金属同士がハマり奥にあたる音が聞こえた。

「こつち向きに回して…」*カチカチカチカ*

エンジン内部から重い音が聞こえる。

唸り声に似たその声はまるで生物のようであった。

「うお、すごい音だな…で、脇にあるこの部品を…踏むっ」

エンジン内部に火花が走る。

大きな音がした後に、エンジン前にあるプロペラが回転を始め、大きな音が断続的に発生して湖中に響き渡った。

「うるさっ！」

とつきに耳を塞ごうとしたが、プロペラから発生した風が体を揺さぶり、それどころではなくなってしまうた。

風は周囲の物体を吹き飛ばし、彼女の持っていた冊子をも飛ばしてしまった。

「しまった！」

取りに行こうとしたがエンジンの突風が激しく、キツく固定していなかったが為に動き始めた機体から脱出することはできなかつた。

(止めなきやつ)

操縦席に座り、左にあったスロットルレバーを操作しようとする。

しかし半ばパニック状態であった魔理沙はレバーの固定スイッチを解除することを思いつかず、固く留まっているそれを動かすことができなかつた。

(クソつ、綺麗に見えたけど錆びてたのか！)

水上を滑走し始めた機体は後ろに水しぶきを伴い始めていた。

止める方法は、今はない。

魔理沙はパニックになった頭で考える

(こいつを捨てることも…だけどそれじゃあ対岸にぶつかって…)

やっぱり上げるつきやねえな、こりゃあ！)

恐怖よりも興味が勝り、覚悟を決めた魔理沙は座席のベルトを締め、当たる強い風の中で前を見るために、ゴーグルをつけ、機体を上げるべく操縦桿を引いた。

しかし機体は若干軽くなったような感覚がしたが、完全に浮き上がるまではいかなかった。

「飛ばないじゃん！」

湖の対岸が見え始める。

回避するために操縦桿を倒し、高速で水上を右に曲がる。

見たこともない量の水しぶきが左手に上がる。

水しぶきが収まると左右に地面が見えた。

機体は湖を曲がりきれずにそのまま川に入ってしまったようだ。

直線上の川をものすごい速度で下りながら魔理沙はパニック状態の頭で必死に考える。

(どうする、魔理沙、どうする?)

頭上が暗くなった。

後ろを見るとアーチ状の橋が一瞬見えた。

(マジかよ……まさか私、人里の裏の川に入ったのか!?)

巨大な人里を船で繋ぐ交易の拠点である川。

湖から流れ始めているそれに入ってしまった。

(前から船でも来たら終わりじゃねえか!)

その時、魔理沙の脳裏に何かがフラッシュバックした。

同じコックピットの中、橋が頭上をいくつも過ぎていく。

「一度止めて！ セッティングを変えるわ！」

「そんな暇はねえ、何とか持ち上げてみせらあ！」



空で一回転した後、なんとか操縦桿を戻し機体を水平に保つことに成功する。青い空を高速で飛ぶ真つ赤な飛行艇。

やっと普通の呼吸ができるようになった魔理沙は初めて人里を上空から見た。

人里に大きな音が響く。

ちようど授業の準備をしていた上白沢慧音は、何事かと思いい作業を中断して外に出る。幸いそこには妖怪の姿はなく、しかしそこにいる人々は各々空を見上げていた。

「空？」

慧音の視線が上を向くと、そこには赤い巨大な物体が飛んでいた。

高速で飛ぶそれは鳥のように空を自由自在に駆けていた。

物体の中央にいる金色の髪をなびかせた人らしき何かがちちらを見る。

慧音は少し警戒したが、乗っている人は手を振ってきた。

どこか喜ばしげな振り方に敵意はないと感じた慧音は手を振り返す。



乗っている人はサムズアップすると、物体を横回転させて飛び去っていった。

「あの機体…来やがったのか」

慧音の背後から男の声がした。

「ドナルド、あれを知ってるのか？」

「ああ、だいぶ前に戦った機体だ。前に話しただろう？ アドリア海の話」

「あの機体がそうなのか？」

「ああ、だけどあの操縦はあいつのじゃねえ。あいつならもつと上手に飛ぶはずだ。

……だが、今の飛行艇乗りも腕は悪くない」

長身の男は飛び去って行く機体を昔を懐かしむ目で見ていた。

「もう一回飛んでみたいのか？」

その姿を見た慧音は声をかける。

「まさか、俺はここで君と暮らせばそれでいいさ」

そう言つて胸を張る姿は少し勇ましく見えた。

「……浮気性のくせに」

「んなつ、俺はもう君一筋だぜ」

「どうだか…なんともなかったし、授業の準備に戻るぞ」

「あつ待てよおい！」

スタスタと歩き始めた慧音を追いかける長身の男。

慧音はその時の彼が少し若返って見えたような気がした。

(慧音先生びっくりしてたなあ)

人里から少し離れた魔理沙は高揚感に包まれていた。

いつも箒に乗って自分の力で飛んでいたのでもあまり景色を楽しむことは少なかったのだが、ゆつたりと飛んでいる間はリラックスすることができるので、改めて空からの眺めを堪能することができる。

花が広く咲いている丘や人々の力で整備された集落、引き込まれそうな緑の中に薄く見え

る道、とどこどこ点在する湖に、それらをつなぐ川。

地上からは意識することもない、しかしどこにでもある秩序は、新たな開拓者を魅了した。  
(綺麗、世界って本当にきれい)

かつて一艇だけ製作され、ある男の手によって空を舞っていた【サボイアS.21】  
その機体は幻想の空を舞う

まるで一時の夢であるような動きは見るものを興奮させ力を持たぬ人々に可能性を示した

外の世界で産声を上げ、数多の人間によって紡がれ、そして忘れ去られ終わってしまったように見えた冒険の時代は幻想郷のある娘に引き継がれる

これからいくつもの異変や事件があるが、この機体が振りまいた夢は多くの人を魅了し、新たな時代を紡ぐ原動力になっていく

幻想郷の冒険飛行家の時代の幕開けである

## 3. Fantasia e Bella

最初の異変から時の経った未来。

幻想郷の空に旅客航空機が飛ぶ。

その隣に並走するターボプロップエンジンを搭載した一機の飛行艇。

遊覧飛行で搭乗していた子供が窓の外を見る。

飛行艇のキャノピーの中には酸素マスクをつけた美しい金髪の女性が乗っていた。

子供たちが手を振ると彼女はサムズアップで返し何回か横回転をした後にアクロバットをして離れていった。

彼女は今も、空を飛び続ける。

おまけく竹林の一目惚れく

Fin.

上白沢慧音は迷いの竹林を歩いていた。

彼女は友人に会いに行つてきた帰り道であつた。

いつものように帰路についていると、うめき声が聞こえたような気がした。

声の主を探し林を歩くと、男が大の字で倒れているのを見つけた。

男は三十歳を過ぎたあたりだろうか、長身でガタイが良く青い服に帽子をかぶっていた。

慧音は彼を見て驚いた、彼は気絶しており、顔面が…というか服に隠れてよく見えないが

全身が酷い怪我だったからである。

慧音が心配して寄ると、うめき声の主が目を見ました。

「umm…where is here.c」

「起きたか？」

男はぼーっとした表情で周りを見渡し、そばで見ていた慧音を発見し二度見した。

「……beautiful」

「は？」

男はたまらない様子で起き上がり慧音の手を取ってきた。

「Will you marry me！」

唐突に何か言ってきた男は真剣な眼差しで慧音を見つめる。

しかし英語のわからない慧音にとって、目を覚ましましたと思ったら唐突に手を取ってきた男は危険人物に写った。

「なんだお前は！」

反射的に頭突きをする慧音。

手を取るほど近い距離にいた男は回避することもできずに全身が腫れあがっている体にくらってダウンしまった。

「なんなんだこの男……」

とりあえず放つてほかの女に手を出して殺されることを防ぐため、家に連れて帰ることにした。

男を担いできた慧音は、家の倉庫の柱に男の手を縄で括り付けて目が覚めるのを待った。家についてから数分後、男は意識を取り戻した。

「umm...why are you tied up?」

「目が覚めたようだな」

男は慧音を見て、さっきのことを思い出したようで少し悪そうな顔をした。

「That girl. sorry for earlier. I just met you and that action was too quick.」

「いったい何を言っているんだ……」

慧音が言うと男は驚いた顔をした。

「Is that Japanese?...この言語で通じるか?」

「えっ、日本語話せるのか?」

唐突に日本語を話し始めた男に慧音は動揺した。

「あつてたみたいだな」

男は何とも言えない表情で慧音を見る。

「その……お嬢さんお名前は？」

「……慧音だ」

「慧音か、お願いがあるんだがこの縄をほどいてくれないか？ さっきから擦れて痛いんだ」

「竹林で倒れてて、目を覚ましたと思つたら手を握つてきた変態を信用しろと？」

「その……その節はすまなかつた。少し早計過ぎたな」

男は申し訳なさそうな表情で頭を下げてきた。

「……貴様の名前を聞こうか」

「貴様つて……口悪いな」

「答えろ」

「俺はチャック、 دونالد・チャックだ」

「Donald……異国の者か？」



「俺はアメリカ人だ、若干イタリアの血も入ってるが」

この男、チャックが嘘を言っていないと判断し、半妖と人間では力の差も歴然であるので、慧音は男の願いを受けることにした

「わかった、解いてやろう」

慧音は男に近づき、縄をほどいた。

「ふう、ありがとよ お嬢ちゃん」

「もう一つ聞く、貴様は幻想郷の者か？」

「幻想郷？俺はアラバマ出身だがそんな土地は知らないぞ」

（多分外の世界の人だな…）

慧音は幻想郷のことをざっとチャックに説明した。

最初は冗談だと思っていたチャックも窓の外の景色と慧音の表情を見て嘘ではないと判断したようだ。

「……こりゃまいったな、本当にここはアメリカじゃないのか」

「あなた、ここに来る直前の記憶はある？」

「確か空を飛んでたな」

それを聞いた慧音は驚いた。

チャックからは特別な力を感じないのに、飛んでいたと明言したからである。

「あなた、人間なのに飛べるの？」

確かに普通の人間でも飛べるようになることはある。

しかし、近代化が進んだ外の世界でその技術は失われているはずだ。

「ああ、まあな」

「……とにかく、今は全身の怪我をどうにかしないといけないな、歩くにも全身それじゃあさすがにろくに動けないだろう」

「ん？ これくらいは怪我なら大丈夫だが？」

よろよろと立ち上がるうとしたチャックは、途中で姿勢を崩しかけとつさに慧音に支えられた。

「無理はするな：多分骨も何本かやつてるだろうし、けが人は無理しないの」

チャックは最初のうちは自分で立とうとしたが、すぐに慧音によるめいてしまった。

「うーん、やつぱり昔のようにはいかないな……」

「治るまではうちに置いておいてあげるから、場所を変えましょ」

二人で倉庫の外に歩いていく。

チャックは隣で自分のことを支えている少女を不思議に思った。

異国の地で何も持っていない自分をたすけてくれることが、名声を目的に世界を駆けたチャックには理解できなかったのだ。

「なんでそこまで君は俺に優しくしてくれるんだ？」

「さあなんでかしらね、あなたが悪人じゃないからかしら？」

「そうか…」

それからチャックは上白沢邸に世話になった。

療養している間、慧音はチャックから外の世界での彼の話を聞いた。

特に驚いたのが、飛行艇についてのことだ。

まさか機械仕掛けの乗り物で空を飛ぶことが可能だとは思っていなかったからである。

飛行艇どころか飛行機すら知らなかった慧音にとつて、未知の乗り物に関する話は興味深く聞いていて楽しいものだった。

チャックはチャックで、慧音から詳しい幻想郷の話聞いて驚きの連続だった。

特に慧音が人間ではないことにはとても驚き、満月の影響で変身し角が生えている様子を見たときには、一瞬食べられるのではないかと思つて逃げ出そうとしたほどであった。

しかし、話をするうちに慧音も普通の人間と変わらぬ人格を持っていることが分かったようであり障壁にはならなかったようだ。

予想以上に回復は早く、一か月後には不自由なく動けるようになっていた。

「もうピンピンじゃない」

「まあ、飛行艇乗りならこれが普通さ」

そう言つてチャックと慧音は散歩に出かける。

ここ十数日の日課だ。

この一か月の間に、チャックと慧音はとても良い友人となつていた。

チャックは最初こそはおとなしくしていたものの、元気になるはずぐに明白な好意を向け、慧音が人間でないことを知つた後もその心は変わらずにアプローチを続け、慧音は少し驚きながらもなぜか拒むこともなかつたのである。

二人は散歩道にある少し大きな湖の湖畔に座つて、チャックが作つたサンドイッチを食べていた。

トマトとスクランブルエッグが挟んであるサンドイッチは慧音のお気に入りだ。

しかし、サンドイッチを口に入れる前に慧音は話し始めた。

「……ドナルド」

「ん？」

「あなたに話があるの」

その口調は重かった。

「なんだ、改まって」

「実はね、あなたには外の世界に帰る方法があるの」

「でもここって外部と隔離されてるんだよな？ 確か何だったか」

「博麗大結界ね：だけどね、外の世界から迷い込んでしまった人は例外的に出られるの」

そう言つて慧音は悲しそうに目を背ける。

「だけどそれは一方通行、一回出たらここに戻るとはできない」

「…慧音」

「多分あなたはここよりも外の世界のほうがいいわ。ここはあなたが過ごすには小さすぎるもの……」

慧音はそれ以上言葉が出なかった。

チャックとの生活は短いながらも彼女にとつて楽しかったのだ。

たった数日であつても、それを手放すのは、以前の生活に戻るのとは、

彼女にとつてつらいものだった。

「慧音」

チャックが慧音の顔を覗き込む。

慧音は目を伏せたまま、しかし目は潤み始めていた。

「慧音、俺は確かに金と名声を求めて世界中を駆け回った。だけどな、目の前にいる女を泣かせてまでそれに執着するほど俺は腐ってないぜ」

彼は幻想郷で暮らすうちに変わった。

お金や名声よりも大事なものを見つけたからだ。

チャックは慧音に寄つて、彼女に語り掛ける。

「それに、多分外じゃ俺はもう死んでるんだ」

「えっ」

慧音は思わずチャックを見る。

「最後に飛んだ時に、俺は雲の上にいたんだ。青い空には一筋の雲が流れててな。噂じゃあ

そこは愛機と共に死んだ飛行艇乗りが行く所なんだ」

チャックはそういつて空を見上げる。

「そんな…」

「だけどそこから生き返ったやつもいる。俺に話した奴も、俺だってそうだ」

慧音はチャックを見る。

彼はどこか優しい顔をしていた。

「だから、ここは多分俺の第二の人生なんだ。俺はここで金や名声よりも美しいものを見つ

けた。それを守りたいんだ」

「チャック…」

「俺はここにいろよ、君と共に生き続ける」

そう言つて慧音を見る。

その瞳はどこまでもまっすぐなものだった。

「…………ふふっ」



思わず慧音は笑ってしまふ。

「俺はマジだぜ？ この場所で慧音を幸せにして見せる」

「そうね、あなたはそういう人だったわね」

「ん？」

そう言つて慧音は立ち上がる。

「さあ、帰りましょ。こんなの柄じゃなかったわ」

「おいおい返事はなしかよ」

「せっかちさんね」

そう言つて二人は帰路についた。

チャックは少し不満げだったが、慧音の足取りは軽やかだった。

く続くく



如月 後戻りできない希望に溢れた未来

「手伝つてあげましょうか？」

少女は明らかに他殺体と分かるそれに動じた素振りも見せずにそう言い放つた。もう一人の少女が答える。

「そうしてもらえとありがたいです。先輩」

「先輩はよして頂戴。実は留年が決まったのよ。有能な後輩が入ってきてくれたお陰で授業に出席する暇がなくなつちやつたの。来年度からは貴方の同級生！ よろしくね」

少女がお辞儀をする。格好も相俟つて中世の淑女のよう。

「じゃあ聞きますけど、この死体に面識はありますか？」

「それは直接会つた事があるかという意味かしら。なら答えはNOよ。写真でならあるわ。彼の名は……思い出せないけれど学部は貴女と同じで心理学部。学年は私の一つ上で三回生。そして——貴女の彼氏だった男よね。それよりも通報しなくていいのかしら？ 遅れたら遅れる程きつく絞られるわよ。幾ら最高学府の生徒といえどもね。特に私たちのような不良サークルなんかは。京都府警つてねちつくくて嫌なのよ。あと敬語もやめて」

「そう。ならこれを見て頂戴。幾ら警察が優秀でも犯人が私以外の人物だとは思わないでしょうね。怪しすぎる人物はスケープゴートであり犯人ではないという推理小説的思考をする絶滅危惧種でもいたら話は別だけど。凶器は私がプレゼントしたスカーフで、手には数本の毛髪。おまけに足元には私の学生証が落ちている。勿論本物よ。一昨日から紛失していたの。彼は無暗に敵を作るようなタイプじゃない。寧ろどんな人間に対しても絶対に越えさせない境界のようなものがある人だった。彼を殺したいと思う程深い付き合いをしていた人なんて私ぐらしいしかない筈よ。それでも最近は別れる一歩手前だったけど。持ち物を盗られた痕跡は無かったから通り魔の可能性はゼロ。彼の腕時計、入学祝いに父親から貰ったものでね、結構高価らしいわ。少なくとも私たちのような学生には手の届かない品物よ。物品目当てなら間違いないわ。持って行ったでしょうね。もし証拠を全て消したとしても昨日私と彼が喧嘩している所を不特定多数に見られている。通報なんかしたら逮捕されること間違いないわね」

「この死体はどうするの？」

「叔父が山を持っているからそこに埋める。管理がされていなくて売っても二束三文にしか

ならない土地だから、踏み入れる者はまずいなと考えていいでしょう」

「私は？」

少女が尋ねたとき、風が二人の間を通った。目深に被った黒い帽子から紅い瞳が覗く。

「……どうということかしら」

「私の処遇はどうなるのかと思って。考えてないの？ 私が通報する可能性。人を呼ぶかもしれないわよ。口封じでもする？ そこに丁度お誂え向きのスカーフがあるじゃない。死体に触るのは抵抗があるかしら。それならばそこに落ちている石で私を殴ればいい」

「手伝ってもらおう。一緒に埋めましょう、死体を。だってあなたは私を告発出来ない。そうでしょ？」

「何故そうきつぱり言い切れるのか、理由を聞かせてもらおうじゃないの」

少女は不敵に笑う。

「あなたにはわたしが必要だから」

「随分と熱烈じゃないの。言っておくけど私はストレートよ」

「わたしも。正確には、あなたの活動には、私が必要。私の眼がないと困るでしょう？ 私が逮捕なんてされたらサークル活動は大打撃を受ける。そんなリスクを背負う程あなたは正義感が強くない筈。寧ろ好奇心のためなら法なんてノイズにしかならないのがあなた。これでも人を見る目には自信があるつもりよ」

「よくわかつてるじゃない。自信もつていいわよ。便利な眼ね。観察力もあるなんて。いいわよ。一緒に埋めましょう。貴女と——秘封倶楽部の未来のために」

死体を部室に運び鋸で切り分ける。何故鋸が置いてあるのだろうと少女は訝しんだが、何かとんでもないことを言われる気がしたので黙々と鋸を引いた。頭部、上腹部、下腹部、左腕、右腕、左足、右足と綺麗には言えないが、切り分けられた人間だったモノを見下ろしながら少女たちは相談した。

「部位は全部で七つ。手足と胴体は半分ずつ持つていくとして、頭部は——後輩である貴女に頼もうかしら」

「都合のいい時ばかり先輩面しちゃって」

「年功序列よ。何度元号が変わろうと遷都が行われようとも無くならない日本の悪しき風習。まあお陰様で楽ができる訳だけど」

少女はウインクをしたが、帽子と濡羽色の髪に隠れてもう一人の少女には伝わらなかつた。自転車にビニールシートで何重に包んだ死体を載せる。成人男性を自転車で運ぶのは流石に無理があつたようだ。少女が地面に突つ伏した。

「あーもー無理よこんなの無理無理！ 運転免許持つてないの？」

「汚い」

「別にこれくらいで汚れたりしないわよ。この砂埃も石畳も隙間から覗く可憐な花もぜーんぶホログラムだし。東京と違つてね」

「見た目の問題よ。ほら、これでも飲んでさつきと埋めちゃいましょう」

そう言つてもう一人の少女は瓶ラムネを少女の頬に当てた。くすぐつたそうに少女が笑い声を上げる。

「冷たい！——あれ？ これ何処で買つてきたの？ 硝子瓶なんてもう何十年も製造されて



ないって聞いたけれど。中古品には見えないし」

「何処つて……その路地の駄菓子屋よ。昔懐かしい店構えで、ぽつちやりとしたおばあさんが一人で切り盛りしていたわ」

——路地？少女は考え込む。この辺りの路地に飲食店は二軒、カフェとバーしかない。少なくとも彼女が直ぐに戻つてこられる距離には駄菓子屋及び瓶ラムネを販売する可能性はある店舗は存在しない。最後に路地を隈なく探索したのは八か月前だから、新しくできた可能性はあるが。だが今時駄菓子屋を開くなんて酔狂な人間が京都にいたら、この私の耳に入らないなんてことがあるだろうか？情報網には自信がある。人間ではないのだろうか。いや、もうこの世界には妖怪の類は存在しない。瓶の問題もある。硝子瓶は令和時代頃に脱プラスチック運動の一環として推奨されていたが結局人間はペットボトルの利便性を手放すことができなかったと聞く。今や硝子瓶はすっかり廃れており、一部の愛好者達の下で極少数が——手作りの物が！製造されるのみだ。こんな大都会の裏道に転がっているような代物ではない。中古品であつても。矢張りこの瓶は異世界由来の物体、所謂オーパーツだろう。物質

については見た所ではこの世界にあるもので作られたように感じるが、それについては詳しく調べてみないとわからない。そしてもう一つ問題がある。何故あの子はこの瓶を見つけたのか。おそらく眼の能力が関係しているのだろう。異世界に干渉できるなんて私が見込んだ通りだ――

難しい顔をしたと思つたらニタニタと奇妙な笑みを零す少女をもう一人の少女が心配そうに覗き込む。

「ううん。何でもないわ。ありがとう」

少女はならいけどと微笑んだ。ラムネをぐいっと飲み干す。二人の少女は同時にぷはーつと息を吐きだし、それから顔を見合わせて笑いあつた。

「さて、水分補給もしたことだしさつきとと埋めちゃいましょう」

えーもう少し休みましょうよわたしもーへとへとよとの声は黙殺された。

「よし！ とうちやーくー！」

「いえーい」

ぱちぱちと気のない拍手はやがて虫の音に紛れて消えていった。少女は地面にへたりと座り込む。もう一人の少女も今度は注意することなく同じように座り込んだ。

「あー疲れた。死体埋めなんてもうこりこり」

「まだ埋めてないけどね。そもそも一回だって犯罪よ」

「あら、貴女死体埋めに抵抗があるタイプ？」

「抵抗って……まあ進んでやりたいことでは無いことだけは確かね」

「生物を大地へ還す儀式とも言えるものよ」

「ものすごく美化すればそうね」

「大体犯罪なら結界暴きだつてそうじゃない。それなのに前者のみ忌避感を感じるのはどうして？ 死体埋めは殺人という禁忌に近いからかしら。埋葬と違い許可を取っていないつまり後ろ暗いことを連想させる。死体に直に触れるのもあるだろうけれど。それとケガレそのものを神のテリトリーに褻もせず埋めることで怒りを買うことへの恐れというのもいいわね。それと貴女は結界暴きを犯罪として捉えていない、だけど死体埋めは犯罪だと認識して

いる。この違いは興味深い。これは上手く掘れば政府が何故結界暴きを罪としたかの解明に繋がりそうだけど今日の所はいいでしょう。そして死体埋めは二人ですれば罪の共有となる。つまりそう簡単に縁を切れなくなる効果があるわ。軽犯罪では良心の呵責も明るみに出た場合のデメリットも少ないからダメね。逆に殺人は重すぎるし、どちらかが従犯になってしまふ。それじゃあダメなのよ。あくまでも対等こそが関係の長続きの秘訣だわ」

「なるほど。だから彼を殺したのね。蓮子」

「なんだあ。気が付いていたの。それじゃあメリーが従犯になっちゃうじゃない」

濡羽色の髪の少女——蓮子が残念そうにする。もう一人の少女——メリーは慰めるように言った。

「なんで分かったのかって聞かれたら困るけどね。強いて言えば貴女ならやりかねないと思うたのと、学生証を抜き取れる人物の心当たりが一人しかいなかったから。まあこれは推理小説じゃないのだし、別にいいでしょう。どうしてこんなことをしたのかの見当はついてる。さつき言っていたことがそのまま動機なんでしょう？ 安心して頂戴。離れる気なんて更々ない

から。まあこれで信じるようなら殺人なんてしなかったでしょうけどね」

「ええ。結界暴きではない、真正正銘の犯罪行為に加担させることで逃げ場をなくそうと思つてね。これで私と貴女は共犯関係。やつぱり雑な計画だったわね。バレる所まで織り込み済みだったのよ。負け惜しみじゃないわ。後で手掛かりをばら撒くつもりだったけど。私は貴女の恋人を手に掛ける程度には賭けている。貴女——メリーの気持ち悪い瞳こそがこの世界を解き明かすキーだとね。メリーはどうかしら？ 私が倶楽部と秘密のためにメリーの大切な人物——まあ実態はそうでもなかったけど、家族は京都にいないし友人だとパンチが弱いから彼を選んだの——を殺したと知ったときの対応を見定めさせて貰ったわ。合格よ。勝手に試してごめんなさいね」

「まさかこんなことまでするとは思ひもよらなかつたけど、つまり人ひとりを犠牲に出来る程の期待をわたしに掛けているってことになるのかしら。ご期待に沿えるよう精進するわ。わたしだつて秘密を暴きたいもの。蓮子、あなたと二人でね」

「それじゃ、改めて平成の世から地を変え綿々と伝わる由緒正しい非公認サークル、秘封俱

「楽部へようこそ。歓迎するわ。マエリベリー・ハーン」

「よろしくね。宇佐見蓮子さん」

蓮子は手を差し伸べた。メリーが掴んだことを確認すると満足そうにニツと笑う。メリーも同じように笑みを浮かべた。

空

屋上の縁に立ち、ゆつくりと地面に向かって倒れる。まあまあの高さがあるマンションなので、多少調整してあるとはいえ風圧が強い。でも途中までは重力に身を任せるほうが好きだから我慢しよう。これはこれで面白い。半宵の街は夜に焦がれた人類による叡智の結晶で光り輝いている。この辺は特に栄えているし。東京に近い上に歴史ある、何と言っても黒船が来航した都市だ。地上の星、とも評されるあれらが魅力的に見えたのはいつまでだろう。わたしはもう本物の星を知ってしまった。文明に毒されていない神々の楽園で。あの世界は本当に魅力的で、目覚めたくないと思いつつも目覚まし時計を止めてコーヒーを胃に流し込んでエレベーターに乗り信号を待ちクラスメイトと朝の挨拶を交わす。こ

の世界に対して完全に未練がないという訳ではないけど、天秤にかけるとしたらわたしは間違いないから選ぶだろう。

緑の点が躑躅の植え込みに変わっていく瞬間を見計らい、体全体を手で包み込むイメージを浮かべる。主に弾幕ごっこでは電子デバイスを媒体にして短時間での超能力の乱用によるわたしの体への負担を分散させているが、自分の体ぐらいなら無くてもいける。着地に失敗して割れると嫌だし。充分なお小遣いを貰っているとはいえスマホはやっぱ値が張る。どうせ買い替えるのならば高性能の物がいいと欲が出るのもあるけど。両親に頼もうにも此間紛失したとねだったばかりだから一体何をしているのかと怪しまれるのは困る。基本的に放任主義な両親だが、わたしも年頃の少女だ。なにか怪しげな連中との付き合いがあると思われて部屋を見られては困ったことになる。少年法があっても銃刀法違反で起訴されるのは御免だ。まあ妖しい連中と付き合いがあるのは事実だけど。そんなことを考えていたらアスファルトが近づいてきた。今だ。マンションの住民が起きださない程度の声で、叫ぶ。

「念力——サイコキネシスアプリ！」

まあ今はアプリを使っていないが、雰囲気だ。かっこつけとも言う。手からびよんと飛び降りると、少し高さを見誤ったようで地面に叩き付けられた。痛い。幸い怪我はしていないようだ。起き上がるのが億劫でコンクリートにそのまま寝つ転がった。空には半月と星が一、二個点在するのみだ。温い風が頬を撫でる。

そういえば、初めて空を飛んだのはいつのことだろう。超能力が使えるようになった年にはばらつきがあり、生まれ持ったものもあればここ十数年の内に身に付いたものもある。飛行はサイコキネシスの応用だが、いつ空を飛ぶという発想に至ったのかはわからない。サイコキネシス自体は生まれた時から持っていたような気がする。どこかで花火を空から見るとたまに見る。小さい時から見てきた夢だ。それが初めての記憶だろうか。空を飛ぶことは気持ちがいい。空を見上げる時間も無い現代人は案外飛行少女の存在に気が付かないのだ。特に深夜は。万が一見られても過労のせいで幻覚を見た、もしくは酔っ払いの戯言として処理されることが多い。億が一、幻覚ではなくリアルだと気が付かれて、兆が一特定でもされたらその時は向こうにでも行けばいい。永住の仕方は……その時になったら考えよう。コツ



コツと足音がする。こんな時間までご苦労なことだ。いや、まずい。がばりと起き上がる。通報されたらとても困る。かくなる上は――

「テレポーションン！」

眼を開けるとそこは自室だった。よし、成功だ。靴を玄関にしまつて手を洗う。母は仕事の疲れでぐっすりだし、父に至つてはまだ帰つていない。今日も午前になると連絡があつた。部屋に戻り、ベッドに潜つて、さあ、幻想郷へ――

「ごきげんよう。董子。今日も夜更かしかしら。悪い子ね」

博麗神社の境内に足を付けたと思つたら後ろから声を掛けられた。ひっくり返るわたしにくすくすと笑みを浮かべながら跪きハンカチを差し出す紫さんはわたしが恨めし気に見つめると、そんなに怖い顔をしないでちょうだいな、折角の可愛らしいお顔が台無しですわと嘯いた。どうせお世辞だろう。でも嬉しい。だつて紫さんのような美しい人（妖怪だけ）からわたしを褒め称す言葉が出てくるのは気分がよくなる。まあきつとネコとかイヌを見た時の、可愛らしい、だらうけれど。

「もう。驚かさないでください。あつこんばんは。紫さん。レイムつちに会いに来ただけ  
ど、起きてる？」

「霊夢なら今日は鬼たちと酒宴ですわ。朝までコースになるでしょうね。董子はまだ子供な  
のだから霊夢と会うのはまた今度にしておきなさい。未成年だからなんて言葉は鬼たちには  
通用しないもの」

「そっかー。じゃあどうしよう。夜は人里か神社から出ないようにってレイムつちに言われ  
てるからなー」

「賢明な判断ですわ」

「うーん。勉強の息抜きに来ただけだな。今から起きてもネット見るぐらいしかすること  
ないし」

「なるほど。つまり董子は今フリーなのね」

それじゃあ、と紫さんはわたしの手を取った。体がふわりと宙に浮く。心の準備が全く出  
来ていない状態でされたものだから、わたしは軽いパニック状態になっていた。足をばたつ

かせるわたしを紫さんは優しく抱きとめる。爽やかで甘い、とてもいい匂いになぜか顔を赤らめた。

「――夜のデートと洒落込みましようか」

紫さんとわたしはぐんぐん空へ昇っていく。悲鳴を上げる暇もなく。気が付いた時には妖怪の山を見下ろしていた。これをなんと呼ぶべきか。どんなに言葉を尽くしてもこれを人に伝えることはできないだろう。きれい、なんて単純な感嘆が出るのにも時間が掛かってしまった。董子、と紫さんの声が聞こえる。優しい声色。董子、とまた。返事をしなければ。でもこの風景をもっと見ていたい。この世界の一部でいたい。目覚めたくない。

「董子」

はつと見やると紫さんはいつもと変わらない笑顔を湛えていた。バツが悪くなり目を逸らすわたしに、気に入ってもらえて何よりですわと微笑む彼女を見るとなにか憑き物が落ちたような気がする。

「」

紫さんの形良い唇が動いた。聞いたものを安心させる落ち着いた艶のある声は花火に掻き消されてしまったが。いや、これは花火ではない。これは——弾幕だ。——そして——幾度も見た光景でもある。

「小町と萃香でしょうね。今宵の舞台は妖怪の山らしい。——それにしても、随分と派手にやるものね。霊夢はどうせ賭けに熱中しているだろうし」

あははと乾いた笑みを浮かべるわたしをよそに紫さんは話す。動く唇が奏でる音色を今度こそ聞き逃さないように、ちよつと恥ずかしいけれど、ぎゅうと身を寄せると紫さんは腕をわたしの腰に回した。そのまま引き寄せる。これはちよつとどころではない。さっきのいい匂いがまた香る。

「答えは見つかった？」

「——どうして、それを」

ふふと笑う紫さんはきつと絡繰りを教えてくれないだろうから、わたしは見つけた答えを述べていく。

「はい。多分。小さい頃神隠しで来た場所が幻想郷で、わたしは弾幕を見ていたんです。空から。今のよう。今のわたしでも自力でこんな高さまで上がることはできない。子供なら尚更。そうだ、わたしは泣いていて、手を引いてもらったんです。それで飛べることに気が付いたんだ。そして、わたしの手を引いてくれたのは、きつと——」

返事をする代わりににつこりと微笑む紫さんを見て、確信した。

「ほとんど憶えてないですけど、綺麗だったことは今でも夢に見ます。ありがとうございます。紫さん。空を飛ばせてくれて——」

「感謝されるようなことはしていませんわ。ああ、それと、童子はまだ気が付いていないよ。うだけれど、あなたはこちらに来るにはあちら側に飽ききっていない」

紫さんの言葉の真意を計りかねているわたしをよそに、彼女の後ろのスキマがどんどん開いていく。

「今日はもう目覚める時間よ——童子」

大きな目がわたしを呑み込んでいく。ゆかりさん、と問いかける間もなく暗闇へと吸い込

まれていった。

頭が痛い。眼を開けると深い蒼と一筋の橙があつた。ブルーモーメントだ。と、いう事は今は五時一〇分頃ということになる。幻想郷に着いたのは零時過ぎだ。まあ紫さんなら時間ぐらいどうとでもなるだろう。いや、それよりもここはどこだ？ 起き上がるとそこにはさつきも見た景色。成程。朝はこんな感じなのか。人々の営みの跡と始まっていく世界が交わつて、また新たな物語を紡ぎ出さんとしている光景。ふと見やると一筋だった光は段々勢力を増している。そして一際強い輝きが穏やかな水面に映る瞬間、わたしの口から息が零れた。そういえば、幻想郷に海はなかつた。じゃあ完全に向こうに行つてしまつたら、この光景も見ることができなくなつてしまうのか。それは嫌だな。海も、街も、この世界をまだもう少し見たい。屋上の縁に立ち、ゆつくりと地面に向かつて倒れる。山下公園まで行つてみよう。地上で見る朝焼けも美しいだろうから。鴉が通り過ぎた。〈了〉

七曜主醬

はじめての自費出版

ここは幻想郷という日本で有つて日本で無い異界、住民達は江戸後期〜明治初期の様な生活を行い朝日と共に起き月が出ると就寝する生活を行う。街には街灯の類は殆ど無く夜になると闇が支配していた。ただこの世界には神、妖怪と言つた幻想の彼方に消えていつた存在が息づいていた。そんな世界にも人々の営みが有る。貸本屋という商売が有り本が貴重だつた時代に本を個人で所有するには場所と財力が必要だつた時に重宝され料金を支払えば一定期間本を貸し与える商売である。この商売は現在でもコミックレンタルという形で存在している。鈴奈庵という貸本屋が街で居を構えていた。家族経営を行う小店舗で本居小鈴という看板娘が居る。彼女は本が好きで好奇心旺盛で不思議や事件に顔を突つ込む傾向にある。

最近は友人の稗田阿求の影響も有り物語を書く事に興味を持っていた。因みに阿求は猿田彦と天鈿女命の子孫で古事記の編纂に係わつたとされる稗田阿礼の転生した姿とも言われており相当の博識であり。覆面小説家阿笠クリスQとしても活躍している。

「面白い、私も阿求みたいに面白い小説を書いてみたいな」小鈴は読んでいた小説を置き



いた。

彼女の書く小説は読み易く物語展開に意外性が有る為、つい夢中になり物語の世界に引き込まれていく。

小説の内容に尊敬と少しの妬みを持ち暖簾の方を見上げると一人の少女が入って来た。

「小鈴、私の小説を読んでいるのね、有難う」少女は挨拶代わりにお礼を言う。

彼女が稗田阿求で有った。

「阿求の小説はいつも楽しみにしているよ」小鈴は笑顔を作り答えそして真剣な表情を作り。

「私の小説を書いて出版してみたい、でも阿求の様にスポンサーが付いていないけどどうしようかなと考えているのよ。」

「なるほど私からのアドバイス、自費出版が良いと思うよ。」

「自費出版は十七世紀に印刷技術が普及してから流行り出した手法で企業以外でも自ら書いた本を商店に売り上げの一部を支払う事により店に置いて貰う手法で江戸時代中期以降都市部にて流行した。」※印刷機を使わず手書きで本を作る手法も存在し鎌倉時代、室町時代は

手書きの方が主流で有った。但し紙代と印刷費は自前用意する必要が有った。特に紙代は高コストで有った。

「小鈴は出版するお金は有るの？」

「店で働いているので多少は、でも私のお小使いだけでは厳しいかも？」

「これも私からのアドバイス、写本のアルバイトはどう？」

写本のアルバイトは手書きによる本の作成で有る。印刷技術が発展していない時代は手書きで本を写すのがメインで仏教の経典写経や物語文字を借りて内容を書き写す等有り古代々中世におけるインテリ達の副業としても人気有った。この幻想郷でもお経や祝詞の写しや古文書の写し等の需要が有った。特に漢文の文章に至っては印刷機に対応していないマイナー漢字や特殊なものでヲシテ文字等神代文字を用いた文書等も有りこの手の文書は手書き写本が活躍している。

小鈴と阿求は貸本屋や稗田家の人脈を使い写本を行った。特に漢文については室町時代迄

公文書として使われており旧家や命蓮寺、博麗神社等を訪問し写本を行った。写本の作業は知識よりも根気と集中力が要求される業務で有り資料を一読する時は楽しいかもしれないが相当疲労した。一説によると古代、中世では写本を行いながら読み書きを覚えたとも言われている。

「なんやかんや有り小鈴は印刷するお金を集めた。

「阿求協力ありがと、これで自費出版出来そうよ」

「小鈴どんな小説を出版するの」

「古事記や古代史の恋愛とか良いと思うよ、猿田彦と天鈿女命の恋愛模様とか？」

「完成したら読ませてね」

やがて小説は完成し鈴奈庵を始め幾つかの商店で小鈴の本が並んだ、少し残念な事だが赤字となってしまうが小鈴の始めての挑戦は終わった。

〈了〉



荻窪ミナミ

蓮子の恋心の行き先は

『蓮子ごめん、今日はレジユメ代わりにおねがいしてもいい？』

蓮子からしたら今日「も」だって言いたかった。通知に気付いて端末を見たら見慣れたアイコンに見慣れた名前に誤字まで。まだ少し汗ばむ季節だというのになんとなく首元の汗が引いていくような感覚がして、それなのに張り付いてくる前髪がいつもより鬱陶しい気さえる。蓮子はいいよ、と一言だけ返信してそのまま大学の講義室へ向かった。

受け取ったレジユメを見ても頭に入ってこない。講師の言葉が音として耳に入っても意味として理解できていないな、とぼんやり考えたりメモに使う紙に意味の無い落書きをしたりして時間を過ごしている。

メリーのせいだ。全部メリーのせいだ。

ここ数ヶ月何をしていてもメリーの嬉しそうに楽しそうに話す姿は蓮子の頭から離れなかった。あの明るい声と無邪気に笑う笑顔がどうして私に向けられているのが彼女には分からない。本当なら私がメリーの立場にいたはずなのにといい気持ちのせいでどうしても素直に

おめでとうと心の底から言えなかった。

メモに使っていたシャーペンの芯が折れて講義の途中だと思いついて出してスクリーンを見る。どうやらレジュメは既に違うページを表示しているようで慌てながら無理やり講義に集中する事に決めた。多分、いくつか抜けている部分があるだろうけれど何とかなるだろうと考えながら数回シャーペンの頭をノックして急いでメモを進めた。

講師が授業の終わりを告げると同時に出席カードが配られる。蓮子は自分に回ってきたカードを受け取り、三枚取って後ろの人に渡す。もう何回も書いたせいで覚えてしまったメリーの学籍番号ともう一人の学籍番号を記入して自分の学籍番号も記入した。何度か見返して間違っていない事を確認するとほぼ同時に後ろからまた出席カードが回ってきた。三枚分の出席カードをこっそり真ん中の方に差し込んで前の人に蓮子も回して席を立つ。学食は早めに行かないと席が埋まってしまう。急がなければ。

早足で学食まで行っても既にほとんど席は埋まってしまった。くると見回しても座

れるような席はほとんど残っていない。少し待って食べやすいものにしようか、それとも少し財布に厳しいけどどこか他のところで食べようかと考えていたら見慣れた姿が見えた。白いリブニットに薄いすみれ色のチュールスカート、そしてふわふわの綺麗な金の髪。間違いない、メリーだ。メリーの向かいにはグレーのサマーニットに黒のパンツ姿の男の姿が見える。近寄ってみても楽しげに話しているようで蓮子の姿に気付きもしない。

「メリー、来てたなら連絡してくれても良かったじゃないの」

「ごめんね、私たちも今来たばかりなのよ。それより蓮子の席も取っておいたわよ？」

メリーは隣の席に置いていたカバンを自分の膝に乗せてトントン、と椅子を軽く叩いた。「ありがとう、助かった」

この状況で席が確保できたのはとてもありがたい。メリーの隣に座って横顔を見ると今日も顔色があまり良くないな、と気づいた。普段から血の色を感じないのに更に白い顔をしていて唇の血色だってあまり良くない。瞼も少し腫れぼったくて可愛い顔が台無しだとさえ思える。蓮子が視線を移して目の前を見ると彼も似たような顔色をしている。旧世紀のお酒だ。



きつと二人で飲んでいたんだろうなと考えると胸の奥の方にチクリとした感覚がしてしまう。

「蓮子ちゃん、おはよう。レジュメありがとうございますね」

「ううん、構わないですよ。送信しますね」

蓮子はタブレットからメリーと男の連絡先を選んで先ほどの講義のレジュメを送信する。送信履歴はほとんどこの二人の連絡先だらけになってしまっている。

「助かったわ。いつもありがとうございますね」

「途中少し寝ちゃってたからメモは足りないかもしれないけど」

嘘をついた。本当は二人の事を考えてぼーつとしていたからだなんて言えなかった。

「珍しいね、いつも真面目な蓮子ちゃんが」

「ちよつとだけ疲れてるのかもしれないです。色々調べものをしてたので……」

彼はからかうような顔をしながら受け取ったレジュメを一瞬確認して席を立った。

「三人揃ったし注文しに行こうか」

「そうね、私が荷物見てるから二人で先に行つて」

メリーが手のひらをヒラヒラと動かしているのを見て彼と一緒に注文口へと向かう為に席を立った。後ろをついて行く形で彼と一緒に注文口へと向かう。少しアルコールの匂いがして本当に旧型酒を飲んだのだと思い知らされてしまった。また胸が痛いような今度は重いものがズシリと入っているような感覚さえした。お腹は空いていたはずなのに急に食欲がどこかへ消えてしまった。

注文口の手前でトレーを取ってメニューを眺めていてもどれもずっしりとした食事ばかりで食べきれぬ気がしない。いつもは大盛りのカレーだとかかつ丼だとかを食べてたのに。

「昨日は飲み過ぎちゃったからうどんにしようと思うんだけど蓮子ちゃんはどうするの？」

「じゃあ私もうどんにしようかな、あまり食べられる気もしないですし……」

そっか、蓮子ちゃんも休まないかね、と笑う横顔は整った顔をしていて。どこかのモデルだと言われても納得してしまいそうな顔が急に蓮子の方を向いた。少し真剣な表情で自分の方を見てきたせいで慌ててしまう。手のひらにじんわりと汗が滲んできて、ごまかすように乾いた唇を少し舐めてから口を開く。

「急にどうしたんですか、そんな真剣な顔をして」

「メリーとの交際記念日に何かサプライズで贈り物をしたくて何を渡せばいいのか相談に乗ってほしくてさ。蓮子ちゃんならメリーの喜ぶもの知ってそうだなって思ってたんだ。今度買に行くときについてきてほしいなって思ってた」

「良いですよ、メリーが好きそうなものなら多分知ってますから」

ふとしたきっかけで蓮子とメリーとの交流が始まった彼はそのままメリーとの交際を始めた。蓮子も彼のことを気になつてはいたけれど、メリーが恥ずかしそうに彼の事が気になつているという相談を受けてからはそのことは忘れるようにしていた。

それなのに彼と二人で買い物をすることに対するメリーへの罪悪感と少し嬉しく思つてしまったことへの罪悪感と自己嫌悪が蓮子の心の中に広がっていった。それじゃあ今週の土曜日ね、と彼が声をかけてきたところで厨房の中から注文を促すおばちゃんの声がしてきて二人でうどんを頼んだ。

席に戻ると白い顔のままのメリーが立ち上がって私も買ってくるわね、とだけ言つて私た

ちと同じように注文口へと向かって行つた。

「伸びる前に先に食べちゃおうつか」

「そうですね、じゃあいただきます」

湯気の立つうどんをすすると出汁の香りが鼻を通っていく。優しい味が少し落ち着くような気持ちになつて安心する。ふとメリーのことを気になつた。

「最近メリーはどうなんですか？」

普通だよ、いつもと変わらないと答えつつも色々と話をしてくれた。蓮子が今度からは二日酔いになるまで旧型酒を飲まないように頼むと申し訳なさそうな顔をしながら目の前の彼は承諾してくれた。自分だつて一緒に秘封倶楽部の活動で真夜中まで遊んでいたのに、でも最近最後に活動したのはいつだったかと蓮子が考えたところにメリーの声が聞こえた。

「ただいま、私もうどんにしちやつたわ」

戻つてきてすぐ先ほどの席ではなく彼の隣に腰を下ろす。付き合っているなら当たり前だと頭の中では分かつていても蓮子の気持ちが沈む。蓮子の頭の中はもしも先に自分が告白し

ていたら彼の隣は自分だったかもしれないのという思いが広がっていた。

次の土曜日の朝、蓮子は自宅の鏡の前で薄いピンク色の口紅を引いたもののすぐにティッシュでふき取った。代わりに普段使っている色つきのリップを軽くつけて家を出る。ちらりと時計を確認するとこの時間なら待ち合わせの時間に間に合いそうだった。

五分程前に待ち合わせ場所に到着すると既に彼の姿があった。

「待たせましたか？」

「いや、さつき来たところ。今日はよろしくね」

にこりと笑いかけてくれた彼とメリーの喜ぶプレゼントを探す為に二人でショッピングモールの中を散策する。色々なお店を見て回る度にメリーの好みを思い出しながら好みに合いそうなものを探す。もう少し色が薄い方が、もう少し使いやすいものが、となかなか決まる気が無い。雑貨店を通り過ぎた時にメリーが以前に欲しがっていたアクセサリを蓮子は見つけて思わず声が出してしまった。

「あ……」

「どうしたの？ 蓮子ちゃん」

「いえ、なんでも無いです。早くプレゼント探さないとですな」

蓮子自身でもどうしてか分からないがそれを欲しがっていることを伝えられないまま通り過ぎて行った。何故か彼からメリーの手に渡ると考えることが良い気持ちにならない気がしていた。メリーが喜ぶものを、と思っていたのにも拘わらずだ。その後も結局、いくつかお店を見て回って決めたものは小振りのぬいぐるみになった。

「今日はありがとう。おかげでいいものを渡せそうだよ」

「とんでもない、メリーの為なら喜んで」

モールの中にあるカフェでコーヒーを飲みながら彼は隣のソファに置いたラッピングのされているぬいぐるみをちらりと見た。自分も淹れたての熱いコーヒーを口に入れると落ち着く香りと程よい酸味が口の中に広がる。口に残る後味も深い香りがあつて格別の逸品と言え

る。今度メリーと一緒に来ようかな、なんて蓮子は考えていた。

こうやつて喫茶店で二人で向かい合つて座つていたらカップルに見えるんじゃないかしら、なんて考えたりしてその考えを頭から振り払う。

「僕たちこうして座つていたら付き合つてるように見えそうだね」

考えてた事が口に出してしまったのだろうか？ 蓮子の背中を冷たいものが伝う。口がからからに乾いているのはコーヒーを飲んだからに違いない。

「そんな、わけ」

冗談めかして声を出そうとしても言葉が詰まったような気がした。大丈夫、気付かれたような様子は無いはずだ。

「ほら、周りもカップルだらけだしさ。それに蓮子ちゃん可愛いから」

「メリーがいるじゃないですか、そういうのはやめてくださいよ」

そうだね、と軽く笑つてまた彼はコーヒーを飲んでた。強く言い過ぎただろうか。気まづいような気がして蓮子ほもぞりと座り直してからまたコーヒーを一口すすつた。なんと

く早く帰って一人でゆつくりとしたい。その後にも何かしら他愛のないような雑談をしていたのに何一つ頭に入っていないはずにほとんどどうわの空で言葉を返していた。

残ったコーヒーの深い香りが今度は舌にもたれるようだったのに無理やり喉の奥に流し込んで飲み干して、そこからどうやって帰ったのかはあまり覚えていない。気付いたら自宅の湯船の中で考え事をしていた。

あの時、どうしてメリーが欲しがっていたアクセサリーを口に出さなかつたんだろう。蓮子は自分でも自分のその問いかけに答えられないままふやける程時間が過ぎていった。

あの二人の記念日当日、蓮子が起きると既にお昼ご飯の時間も過ぎていた。朝ごはん代わりのサンドイッチを食べながら端末を使ってオカルトな噂を探してみる。何かしら面白そうな話があれば良いなと思うけれど、自分だけで興味が出るような話題は見つからない。

食べ終わって食器もそのままにふううと長いため息をつく。何もやる事が無い。今にして思えば迷惑な理由で喫茶店に呼び出されていたのさえ恋しい。最後に夢を見たと呼び出され



たのはいつだったかなと考えてたらまた眠気が襲ってきた。休日はどうしてこんなに眠くなるんだろうな、と思う間も無いまま瞼の重さに従って目を閉じた。

インターホンの音がして目が覚めた。閉め忘れたカーテンに気付いて窓の外を見ると真つ暗になっていて星すら見えている。日付はもう変わっているというのに一体誰が来たのかとモニターを見るとそこにいたのは見慣れた二人の姿がある。真つ赤な顔で肩を支えられてようやく立っているメリーにそれを支える彼。

「どうしたの！ 今開けるから」

玄関の鍵と扉を開けるとツンとしたアルコールの匂いと酸っぱい匂いがした。メリーの服を見ると少しだけ胸元が何かで濡れている。旧型酒に違いない。

「メリーが飲み過ぎちゃって、それでここの住所を言っていたからそれで連れてきたんだけど……」

「早く上がって、二人とも。そしたらお水と……メリーはお風呂に入れなきゃ」

靴を脱がせてから彼にはリビングで待つてもらおう。ぐったりしたメリーを支えながら脱衣所に連れて行き服を脱がせてその場に座らせてコップに水を入れて持たせる。メリーはうつむいてうう、と呻き声を出しながらコップに口をつけるとそのまま静止した。胃に全部の神経を集中させているとその顔になるよね。分かるよメリー。

「飲める？」

ほんの少しだけ口にして腕だけでコップを突き返してくるメリー。両手を持って脱衣所から風呂場に誘導すると素直に従ってシャワーを浴びさせてくれた。メリーは具合が悪そうにしていたものの、化粧を落として汗も流してみると多少はさっぱりとした顔をしていた。リビングを通って奥の部屋に連れて歩く時も両手を握って自分が後ろ向きに歩いて向かい合うような形で誘導すると無言でほとんど目を閉じたまま歩いてきてくれたし、ベッドまで行くほとんど倒れこむような形でメリーは眠った。

リビングに戻るとほとんど呆然としている状態の彼が出迎えてくれた。また二人で話せるチャンスが来るとも思っていないなかつたので嬉しくなってしまう。ソファで座っている彼の横

に自分も腰を下ろす。

「メリー寝ましたよ、大丈夫そうです。大変でしたね」

「ううん、むしろありがとう。この近くのバーで旧型酒を出すところがあつてそこで飲み過ぎちゃったみたいでね」

「それは見たら分かりますよ」

少し具合が悪そうなだけで命に別状があるほどの酔いではないのは見て分かる。ただ、この様子だと明日も具合の悪さが続くだろうしもしかしてここ最近の二日酔いは全部このくらい飲んでいるのかもしれないと思うと旧型酒の怖さを感じる。明日が辛いと分かっているにもかかわらずどうしてこんなに飲んでしまうんだろう。

「少し飲み直さない？ 少しでも飲めれば旧型酒があるんだけど」

素敵な誘いに抵抗できないまま私たちは静かに彼の持つてきた旧型酒を飲み始めた。

「それで、メリーの夢の話になつてさ。結構聞いていて面白いんだよ」

「私もよくそれで喫茶店に呼び出されてたんですけどね」

ちよつと迷惑だったわ、なんて付け加える。

お酒が進んできて口が回るようになってきた。私たちは彼が持っていた小さなボトルをほとんど空けていた。グラスの中の琥珀色の液体はとろりとして燻製のような匂いとバニラのような匂いが混ざり合つて甘いのに上品な雰囲気がある。以前の気まずい空気を既に忘れられる程の魔力は旧型酒にしか無いと思う。

頭がふわふわとして気持ちが良いと思えるくらいになった頃彼は急に座りながらこちらへ近付いてきた。あれ？と思う間も無いまま彼は急に肩に手を回してきた。急激にアルコールの気持ち良さが消える。

「メリーと勘違いしてませんか？」

「蓮子ちゃんも可愛いからつい」

「やめてちょうだい」

彼の腕を振り払う。端正な顔立ちをしているなと思つていた彼の顔は今もう見たくもな

い。今まで抱いていた自分の感情さえも気持ち悪い。

「今すぐ帰ってください、すぐに」

「なにそれ、真面目過ぎない？」

立ち上がって彼の腕を引っ張って立ち上がらせて玄関まで押し出す。ほとんど力づくで外に追い出すとボタンと扉を閉めて鍵をかけた。最悪だった。蓮子は急に電気の光が目に入るとガンガンと目の奥に響くような痛みを感じてソファへと戻ってそのまま残っていたお酒を飲んで目を閉じた。

今まで気になっていたのは彼じゃなくて彼の話すメリーの話だったんだなあ、とぼんやりと思いながらまた眠った。

蓮子は強烈な喉の渇きで目が覚めた。決して気持ちの良いとは言えない朝だ。しかもソファで寝てしまったせいで背中が凝り固まっている。ん、と背中を伸ばすと背骨がぼき、と音をさせて気持ちが良い。さて、メリーを起こしに行こうかと立ち上がろうとして気付く。

「どうやって伝えようか。あなたの恋人は私が追い出しましたなんて伝えられるだろうか？素直に伝えるかどうかどうしようか悩んでいたら奥の部屋のドアが開いてメリーの姿が見えた。」

「おはよう、蓮子」

「おはよう、メリー。体調はどう？」

「信じられない位素敵な朝よ」

頭を押さえながら扉の取っ手を持ったまま動かないメリー。顔色は白を越して青さすら感じる。今までに無いくらい体調が悪そうだった。

「昨日はきつと迷惑をかけたでしょう？ごめんなさい」

「覚えてないの？」

「ええ、お店を出たところまでは少し覚えてるのだけれど。どうやってここまで来たのか分からないし、どうしてここにいるのかも分からないの。きつと突然来て大変だったでしょう？本当にごめんなさい」

「気にしてないって」

お互いに顔色が悪いままふらふらのままソファに並んで座る。二人でくた、としながら背もたれに背中を預けてほとんど天井を見るような形で端末を取り出して一緒に見る。

「あのね、昨日見つけた場所なんだけれどここにはこんな噂があつて」

「それ知らないわよ私」

「だって私が見つけたんだもん」

昨日と同じものを見ているのに今は時間が過ぎるのがあつという間に感じるくらい楽しい。何か月ぶりに秘封倶楽部の活動をしていると心が軽くなるようだった。その後も一人で色々な話をして、気付くとあつという間に夕方になっていた。メリーは明日も授業があるから、と帰つていった。

『今借りてる服は明日洗濯してから返すわね』

メリーが帰つてすぐに端末の通知が来て画面を見たら見慣れたアイコンに見慣れた名前があつた。まだ頭は少し痛いし喉もずっと渴いているけれど、明日また会えると思うと気分だけは悪くはなかつた。それから少しして、また通知が来た。

『それとさつき話してた場所、今週中には行きましょう！予定は空いてるかしら？』

それからしばらくして、メリーが授業に遅れたり欠席をすることが無くなった。いつもの喫茶店にまた呼び出されて今度はどんな夢の話をされるのだろうかと思っていたけど、どうやら二人は別れたようだった。半泣きで別れたことを言いながらメリーは「女の子をアクセサリー扱いするだなんて失礼だわ！」とプリプリと怒っていた。

「暗にそれは自分もアクセサリーになるほど可愛いって言ってるのかしら？」

からかうようにちらとメリーを見るともう！と頬を膨らませて更に怒らせてしまったようだった。その可愛らしい姿とくるくると変わる表情のメリーとならずと一緒に、どこまでも二人で行けるな、と蓮子は思いながらコーヒースーツした。

〈了〉



霜月レイ

幻想から始まるラジオ

『えつと、あーあー。これでいいのか？』

『ええ、大丈夫です』

『そうか、そりゃあよかつたぜ』

夕食をそこそこに、自室に戻った私は、借りた本を読むついでにラジオをつけた。日本の山中にある幻想郷。その中には塙で囲まれた里がある。ここには人間が住み、私もやはりここに住んでいる。

幻想郷と外の世界が隔離されてはや百三十年程。外の世界で明治時代と呼ばれる頃から、幻想郷は独自の歴史を歩み出した。外の世界の人間、いわゆる外来人からもたらされる情報によれば今の人間たちはスマートフォンと呼ばれる表札のような機械を持ち歩いているらしい。なんでもどこに行くにもずっとその表札を見ていて、もはやそれがないと生きられないようにされているのだとか。それで情報を得ているとのことだが、私はそんなものより本にまとめられた情報のほうがわかりやすく正しいと思う。厳密に言えばその情報を一つに鵜呑みにしないで比較することの方が大切ではないのか。

『で、これ始まつてるのか？』

『始まつてますね、ほら』

ラジオの向こうから、今流れた声が再び流れてくる。私は音楽を聴くつもりでラジオをつけたのだが、どうやら雑談の枠だったようだ。だが、本を読むためにはちょうどいいかもしれない。

……しかしこの声、どこかで聞いたことがある。確か……。

『まさか私がラジオをするとはな。確かいつかラジオ放送を試みたことあつたよな？』

『そういえばそんなことありましたね』

あれは春雪異変の真つ只中だったか……家にあつた新聞に載っていた。

『お前は家に籠りっぱで知らないんじゃないのか？』

『風のたよりは聞きますよ。これでも天狗なんですから。つて、あなたが私に質問したんじゃないですか』

『忘れたぜ』

そういえばあの新聞も天狗が書いたものだと聞いていた。確か射命丸文。でも彼女は人里でもよく見かけるし、引きこもりではないはずだが。

『自己紹介でもします？』

『自己紹介ね……このまま隠していいんじゃないか？』

『これから話すというのに、うっかり正体が漏れるかもしれませんよ。それにあなたに近い人間はわかるでしょう。口調や声という特徴がありますし』

それほど近い人間ではないが見当はついた。この女性にしては珍しい男口調、人間でこの言葉を使うのは一人くらいしかいない。妖怪だったらわからない。

『じゃあ変えるわ。これならわからないんじゃないの？』

『わかりますよ』

声を少し高くし口調も変化させているが、その高さは無理がある。口調が似合っているのは驚きだが。

『そうだな、博麗霊夢。巫女だぜ』

嘘つけ！

『嘘はダメですよ』

『じゃ、いいぜ。私、霧雨魔理沙というものだ』

やはりか。東洋の西洋魔術師を名乗る魔法使い、霧雨魔理沙。今までの異変には博麗の巫女と共に攻撃している。彼女は魔法使いとはいえ人間である。けれど、命名決闘法上ではあるものの天性の力を持つ巫女や妖怪たちに太刀打ちできる彼女は人間を超えているだろう。

三年前の宗教異変の時も人間代表として数ある宗教家達と渡り合っていた。ある意味憧れの存在だ。

『で、お前も自己紹介しなきゃいけないな。私だけやるといふのはアンフェアだぜ』

『それはしょうがないですね。まあフェアじゃないのももちろんやりますとも。文とは違いますから。姫海棠はたてです。花果子念報という新聞作ってます』

『文々の方があれでも人気だからな。頑張れよ新人』

『七年はやってますよ』

『その差は結構でかいぜ』

「花果子念報」か。あまり聞いたことのない新聞だ。

『あ、魔理沙さん異変解決お疲れ様でした』

異変……？ 最近何かあったか……？

『お、おう。これ天狗から感謝されることなのか？』

『機械の蜘蛛が山を荒らしていたので、そこに住む我々からしたら安心ですよ』  
機械の蜘蛛か。外来人のいうドローンとかいうやつだろうか？

『そうなのか。まあ早苗もいたしな……』

『で結局どこに行つたんですか？』

『……どこまで話していいんだ？ 結構でかい話だが。えい、口止めされているしな……』  
『じゃあ言えるところまでいいですよ』

何故魔理沙は「えい」で言い直した……？ それを言うことすら口止めされているのか。

『まあ私らは月に行つたぜ。宇宙服はなかったけどな』

月だと……ゲホッゲホッ、驚きで声をあげてしまった。ついでに喉が痛い。飲んでたお茶でむせた。

『月ですか……八年前、あなた方がロケットで飛んでいった時以来ですか？』

『かもな』

『あの時は大変でしたよ……一ヶ月経っても博麗の巫女が見つからないんですから。生きてよかったですけど』

『あいつはそんな簡単にはくたばらないだろ。毒にあたってピンピンしてそうだ』

彼女も一応人間だと思うのだが。幻想郷縁起には能力が強いだけで人間だと書いてあったはずだが。

『しかしこれ、どのくらいの人が聞いているんだ？ てつきりでかい建物とかに入って何人もの人、まあ妖怪が動いてやつてるもんだと思ってたんだが……こんな呑み屋の奥の方で』  
呑み屋か……道理でさつきから呑んべえの話し声が聞こえるわけだ。それが人かどうかはわからないが。

『河童と守矢神社がなんとかしてくれました。索道の時にいでにアンテナを張り巡らせてましたし』

『幻想郷の技術が壊れるぜ。そういえば地底に行った時も紫が無線機とやらを作ってたな。同じ仕組みか？』

『……かどうかはわかりませんが、今回はこれで十分です』

ボンボンという音のはたての声に被って聞こえる。マイクとやらを叩いたのか？うるさい。『これ、スマートフォンとやらか？香霖堂で見たぜ。あとこれについてるカメラを使って配信できるんだろ？見てる方も言霊を送れて』

『残念ですが一方向、声だけです』

『つまんないな。あれ？お前これじゃないケータイ持ってたよな？』

『ああ、これですか。これは色々できるので……ラジオとは別です』

外来人曰く二台持ちというらしい。豪華だ。

『ラジオとやらは企画かなんかを用意してやるんだろ？これはただ呑んでいるだけだぜ。』



最初の建物の質問もそうだったんだが。で結局何人が聞いているんだ？」

ラジオ自体はある程度機械が弄れるものならば簡単に作ることができる。人里にも作っている奴らはいる。しかし大体の人は河童の出張販売から買っているのではないだろうか。人里の者が作るものよりも小さいが価格も安い。手のひらに収まるサイズだ。技術の河童だけに精密さは高いがまれに壊れることがある。そういう時は金をぼったくるが人里の連中に任せるしかない。河童は返品対応と謳っておきながら実際に対応しているところは見たことがない。人見知りだからかもしれないが。

話を戻そう。人間達は呑み屋など、人が集まっているところでみんなで盛り上がるためにラジオを聞くことはあれど、家の娯楽としてラジオを聞くことはないのではないか。聞くとしても音楽や天気予報くらい。ましてや里の外に住む人間と天狗の記者がただ呑むだけの放送を聞きたいと思うものなど少数派だろう。はたても同じ結論のようだ。

『一人二人くらいではないでしょうか。少なくともラジオが広まっている人里でも聞く人は皆無でしょう』

残念、ここにいます。そういえば人里でラジオが流行った理由も「霊が取り憑いて音が出る機械」という都市伝説が流れたからだったような。ちなみに後日里の人間の友人に話を聞いたら、案の定私の周りに聞いていた人はいなかった。

『しかしまあ、話が来た時から疑問だったが、これお前がやるようなもんじゃあないよなあ。どっちかというところあの鴉天狗がやりそうなもんだが』

『私も鴉天狗ですが』

『あれ？ そうだったか。お前は鴉天狗っていう感じはしないぜ。まあお前さんがやるようなことじゃないぜ』

『出てきてもう七年なんだけど、やっぱり影が薄いよね』

『太陽に当たれば濃くなるぜ』

そういう意味ではないと思うのだが。確かに曇りの時より晴れの時のほうが影は強くなるが。

『文がここしばらくあちこちに飛んでいってインタビューを敢行してるらしいんですよ』

『へえ、私のところにも来るかな』

『……どうでしょう。ただあいつのことだから割と過激な内容を求めてるんでしょうけど』  
『確かにあいつは過激だな』

そうだろうか。人里で会う時は気の良さそうなお姉さんだったが……いや、紙面は確かに攻めた内容だった。なんせ春雪異変解決直後にその黒幕に接触していたのだから。私がその黒幕のことを知ったのはさらに後になってからだが。

『で、それがお前にどう繋がるんだ』

『文はネタを求めて飛び回ってますが、三年前に更新された幻想郷縁起にあつた対談のように、あなたを介して情報を得るほうが色々楽だと思ひまして』

『私の口は重いぞ』

『もちろんこの時間の飲食代は私が払います。なんなら出演代など更に弾みますが』

『……うぐ』

つくづく人は金に弱いな。でなきや買収は起きないか。

『それにあなたを介しているとはいえ私の変な加工はできません。だから隠蔽は無理です。』

そしてその情報はすぐに利用者に届けられます。リアルタイムで聞いている人たちに限りま  
すがね』

私のことか。聞いていてよかった。

『ただ、逆にいえばうつかり漏らしたらそれを止めることはできません』

『おお、怖いぜ』

……聞いていることがバレたら命を狙われるかもしれないな。身の回りに気をつけなければ。

『録音はしてるんですけどね。自分で記事を書く際の参考にするので』

まずはたてが狙われるか。情報を持っている奴ほど握られたものは消そうと動く。なか

か危ない活動だ……。

『それは公開しないのか？』

『リアルタイムで得られる情報に価値があるのです。情報は自分から得ようとしないと得る

ことはできないのです』

これには同意だ。本がそうだが、情報はラジオなどで向こうから流れてくるものが例外で、

自分から情報を開かないと得ることができない。本を押し付けられても自分でページを捲らなければ情報を得ることはできない。このラジオだつて自分から情報を得るために聞けば情報を得ることができる。

……現状はただ雑談をしているだけだが。

『確かに。だから私は図書館から本を自分から借りてるぜ。情報を得ているからな』

……幻想郷縁起でも書いてあったが、魔理沙はことあるごとに自分の行動を正当化しようしていないか？ 幻想郷縁起の内容が正しいという前提で言えば、彼女のやっていることは窃盗だ。文々。新聞は強盗のような強引さも、怪盗のような大胆さが無いことから家に人がいる空き巣としていたが。

『……そういえば魔理沙さんは弾幕……弾幕の研究を纏めた本を作つてましたよね』

『お、よく知ってるな。もう六年くらい前か？ あれは発刊しなかつたんだが……』

『風のたより程度には小耳に挟んでますよ』

『お前に家の中からいつの間にか撮られているかもしれない。人権はどうした』

『幻想郷の管理者はその境界をやすやすと超えてくるはずですけど』

管理者といえ、八雲紫か……。神出鬼没で妖怪らしい妖怪。遠い昔からいる妖怪で、幻想郷を成り立たせる博麗大結界の創設者だ。博麗の巫女も幻想郷に重要な存在だが、彼女の方が重要な存在だろう。境界を操る能力というあらゆるものの生死や存在を操れる神に近い能力。

私は彼女にまだ会ったことがないが、いつか会ってみたい。

『あれも自分から情報を集めに行つたぜ。正しいことだ』

『弾幕は押し付けで見せつけられてますがね』

『で、あれがどうした』

『あれはなんの目的で作つたのですか？』

『なんの目的……？ なんだつたか……？ 他の奴らの弾幕を自分に取り入れようとしたんだつ

けか？』

『本当にそれが目的なんですか？』

『いや、ちよつと待てよ……』

ここで魔理沙は長い沈黙に入った。はたても特に声を出さないので呑み屋の人の声がより鮮明に聞こえる。

壁掛け時計を見ればもう聴き始めてから一時間半経っていた。一時間半前に開いた手元の本は一ページも進んでいなかった。時間というのは早いし、しっかりとラジオに引き込まれたようだ。

しかし……魔理沙が黙り始めてもう五分くらいだろうか。一向に魔理沙が話を再び始める気配はない。向こうの様子は声だけでしか読み取れないため、どういう状態になっているかはつきりとわからない。ひよつとしたらトイレに行っているのかもしれない。私もちよつどいいと思ったのでトイレに行くことにした。

四分くらい経って戻ってきてても、会話は再開してないようだ。かれこれ十分くらい黙っているのではないだろうか？ ラジオにとつてそれは致命的だと思うのだが。まさか私のいない間に放送が終わったわけではないだろうか？

『あ、ああ。思い出した。鴉天狗の手帳のように、何かを書き留めたら見えてくるものがあるんじゃないと思っただ』

そう思ったらいきなり声が聞こえた。ほ、ほお？ 偉く悩んだ末に出たものがそれとは、少し拍子抜けだ。

『つまり他の人のものからなにか有用なものをとろうとしたってことですか？』

『まあそんなところだ』

つまり？

『さっき話した内容とあまり変わってないようですけどねえ。この時間が無駄になりました』この十分を返せ。拍子抜けどころじゃない。



『そーれはちよつと厄介ですねえ……』

『あ？ 問題か？』

『ええ、大問題ですよ。命名決闘法は覚えていますね？』

命名決闘法。妖怪は戦いなどによつて力を保つが、妖怪同士の決闘は下手をすると幻想郷の崩壊の恐れがある。そこで幻想郷などに大きな影響を与えずに決闘を行うために作られたものだ。

一つ、妖怪が異変を起こし易くする。

一つ、人間が異変を解決し易くする。

一つ、完全な実力主義を否定する。

一つ、美しさと思念に勝る物は無し。

十三年前の紅霧異変で初めて採用されて以降、異変解決は格闘になつてもこの形をベースにして行われているらしい。誰でも異変に参加できるようになつた素晴らしいシステムだ。もつとも私はこのルールが成り立つた時代には生まれていなかったが。

しかしそれがどうしたのだろう。

『それで魔理沙さん、あの本の時にこう書いてましたよね？何も制限されていないという事は、何でも出来る反面、すぐに最適解が求まってしまい、余計な事はしなくなる。』と』

『あ、確かに書いたな。自由ならば最も使いやすく、最も効果的な攻撃だけを行えばよい。ともな』

『でしよう？しかしそれは弾幕の美しさを樂しむことが無くなるのではないですか？』

美しさを樂しむだつて？

『命名決闘法には美しさと思念に勝る物はないとされています。つまり弾幕は決闘であると同時に美しさを目的にしています。美しさを競っている。しかし決闘だけを目的にしてしまえば、全画面に発射される隙間の無い弾幕になってしまいます。美しさを樂しむ目的が無くなつてしまいます』

……なるほど。弾幕は遊びである。それゆえに決闘の攻撃以外の目的、美しさが生まれる。しかしその命名決闘法を構成する重要な目的が無くなれば、命名決闘法の根底に則つていな

いことになる。つまり魔理沙の研究は「弹幕の攻撃」を追求した結果弹幕の定義を損なっていた可能性があるのだ。

ん？ 昨年起きた天邪鬼逃走騒動のときは天邪鬼に対して隙間のない弹幕を張っていたよ。あのときは天邪鬼が魔法道具をもっていたのもあるが……。

『だからあいつは全方向に隙間なく撃ってきていたのか。絶対殺しにきてたぜ』

あいつとは誰だ？ 三年前の幻想郷縁起にはそんなこと書いてなかったが……月の連中だろっか？

『私がやっていたことは弹幕自体の定義を崩すことだったってわけか。まさか六年越しに書いた本を指摘されるとは思わなかったぜ』

『……さて、そろそろ終わりますか』

『おお、もうこんな時間か。時間というものは早いぜ』

それからしばらく経った。時計を見れば子一つを指していた。いい時間だ。時間が早いのは魔理沙が長いこと悩んでいたせいだったと思うが、あつという間だったのは同意する。

『魔理沙さん、何か言うことあります？』

『ん、そうだな……これはラジオなのか？ただ呑みながら話してただけだぜ』  
呑んでる様子はこつちに伝わってこなかったが。

『お前は？』

『初めての試みですが楽しかったですよ。いい経験です』

『そうか。で、次はどうする？あるかはわからんが』

『誰か呼んでみましょうか。この放送を知っている人にもよりますが』

『知らなくたって説明すれば大丈夫じゃないか？』

『そうですね……あ、お勘定お願いします』

ごそごそと物を整理するような音が聞こえる。

『アリスとか霊夢あたりでも呼んでみるか？』

博麗の巫女か。宴会ならともかく彼女がこういうものに参加するとは思にくいが。

『多分酒代とかが出るならよろこんでやつてくるだろうな。あいつは』

前言撤回。来るかもしれない。私より彼女を知る者が言うのだからそちらのほうが信憑性は高いだろう。

『さて、どれくらいいたのかわかりませんが、これを聞いてくださったみなさん、ありがとうございます。』

お疲れさん。

『虚無にひとりごちても悲しいだけだぜ』

私は聞いているが。というかこの話放送が始まった時にこの話したぞ。

『一応感謝は大事ですよ。顔も知らぬ誰かが聞いてらっしゃるかもしれないじゃないですか』  
私と魔理沙は一応顔見知りのはず——魔理沙が私のことを顔見知りとしているかはわからないが——だが、はたてとは会ったことがない。今度探さねば。

『それじゃ終わります。ありがとうございます』

そう聞こえてすぐにブツリと放送が切れた。

いかげん寝る準備を始めよう。ラジオの電源を切り、押入れから布団を引っ張り出す。いつか私もこの放送に……そんな妄想が頭をよぎる。これはラジオが続く前提の話ではあるが。しかしおそらく呼ばれることになるのは魔理沙やはたてと仲の良い相手だろう。私は人里で魔理沙とたまに会って話すくらいで相当仲が良いわけではない。よってその妄想はただの幻想である。

しかし聞くことによつて擬似的に参加することはできる。というかできた。こちらから発信することは不可能だが、魔理沙達の動きに反応することは可能だ。そう思うだけで放送が楽しく、待ち遠しくなる。

そうして私はこの放送のリスナーになった。〈了〉

あらざり

はじめてのお酒

「ほら、ぐいっと、ぐっと」

「いや、あの、私はまだ未成年で」

「んあにがミセーネンだつーの、主賓なんだからさ、ほらほら」

「わああアルハラですよアルハラ、飲みますから、押し付けないでつて！」

普段朗らかに空を飛び回り、優雅に弾幕を交わしあう少女たちが、普段とは全く違う姿でふらふらと動き回っている……、芋虫のように這いずつていふというほうが正しいのかもしれないが。

手に持った盃の中に並々と透明な液体が注がれていく。

トプトプトプと軽快な音をたてて注がれた液体は、器の限界を超えて、淵からツウーと一滴だけ零れた。

かつて、お父さんが一人、夜中に隠れて飲んでいた。

ぐびり、と喉を鳴らして飲む姿がともおいしそうに見えた、あの液体。

「おおい！ 皆あ！ 董子は今日が初めてのお酒だつてさあ！」



白黒の服を着た、真つ赤な顔をした少女が心底楽しそうな笑顔で言う。

ああ、勘弁してほしい。こういった形での注目はなれてない。

ふと気づくと、周りの人妖たちが水を打ったように静まり返っている。

皆の視線が私と、私の手元にある酒に注がれている。

私は、ふう、と小さく息を吐いて

まるでそれが厳かな儀式であるかのように感じながら。

そつと口づけをして――

---

「宴会い？」

「そ、ここ最近いろんな異変がたて続いて出来てなかったからな――」

「あんたがよくわかんない球ツころをドツカンドツカンするものだから、月がアレしたりコレが何したりで大変だったのよ。劳いなさいよ私たちを」

「ごめーん霊夢っちー」

「この若人め」

「私らと大して変わらないだろ」

他愛もない会話を広げながら、私は思いを馳せる。

学生という身において、宴会ほど縁がない言葉もそうそうない。特に悲しくもないが友達のいない、孤独を決め込んでいる私ともなれば猶更だ。

宴会、宴の会、最後にそういった催しに参加したのは、小学校の頃の子供会のぱーちーだったろうか、オレンジジュースを隅っこで飲んでいたことばかりを覚えている。

「ねえ……その宴会、私もないとだめ？」

いくら気心がある程度しれたとはいえ、私は件の異変の元凶の上、まだまだこの世界の新参者だ。異変の時はあくまで気が大きくなっただけで、本来そもそも大人数で――

「駄目に決まってるでしょうが」

「駄目に決まってるよなあ」

唱和だった。ああ、逃げ場がない。

「はいこれ、霖之助さんに刷ってもらったチラシね、あっちこっち有名どころに配ってきて」「えつ、あつ、あれ？ この話の流れで私が行くんですか？」

「そりやあまあ、主賓だからなあ、主賓が配るのは当然だろうな」

「この人たち平然と無茶苦茶なことを言う！！」

「まあまあ、道案内ぐらいは私もついて行ってやるからさ、泥船に乗った気持ちで一緒に行こうぜ」

ああ、なんて気が重い。

こうして私は、魔理沙さんの泥船に乗って幻想郷中を引きずりまわされる羽目になったのだ。

――

「とりあえず順番に回っていくぞー」

「順番って、何の順番ですか？」

「異変だよ異変、異変起こした問題児たち全員にお礼参りするってわけよ」

「お礼参りの意味、それで合ってたっけ？」

「細かいことはいいんだよ、今回の宴会はお前さんの顔合わせの面もあるからな」

「ほら、ついたぞ」

魔理沙さんはふわりと、紅く大きな洋館の前に箒を下すと

「はい、いつてらっしゃい」

と、どきりと私の腕にチラシの束を手渡した。

「ちよちよちよちよつと、無理ですつて、無茶ですつて初対面ですよ……!?」

「大丈夫だ、人はだれしも初めは初対面なんだ、私も初めてこの屋敷に入ったときはそりやあもう……」

「その話長くなります？ 私平成生まれなんで流されませんよ」世代舐めないでください」

「うう、自我が強いから流されてくれないぜ……」

私はぐつとチラシの束を押し返しながら

「ほら、行きますから。付いてきてくださいよ」

「なんだ、結局行くのか」

「一人で行くのが怖いだけです。知らない人たち……人たち？ なんですから」

「はいはい、わかつたわかつた、とりあえず先ずそこにいる門番にチラシを渡しとけ」  
彼女がそういつて指差した先には、アジア系の香りのする美人が、門の前でゆつたりとした演武を舞っていた。

「おやおや、今日は随分と行儀が良いのですね魔理沙さん！」

「そちらのお連れの方は…初めましてですかね、你好デイハオ！」

わつ、今までの幻想郷の人物と比べると考えられないほど丁寧に挨拶をされて、思わず面食らってしまう。こういう時、本当に自分の陰の氣質が嫌になる。私は喉の奥で言葉を詰まらせそうになりながら

「あつ、えう。ニイハー」

「おいすおいす美鈴、こいつ董子、かくかくしかじか」

「うわつ雑、そして何も伝わらない。まあだいたい想像はつきますけど」

「ほらあもう、言葉がつんのめつてやり場をなくしちゃつてるじゃないですか、ごめんなきいね。貴女は——」

「あつ、えーと、はい、宇佐見董子です。ニイハオ」

こほん、と少し咳ばらいをしながら門番さん（仮）に挨拶をした。

「私は美鈴、紅美鈴よ。貴方が董子さんね、新聞で見たわ。ようこそ幻想郷へ、そして紅魔館へ」

「あつ、もしかして姫海棠さんの。ちよつと恥ずかしいですね」

思わぬところで知られているもので、気恥ずかしさでポリポリとほほを掻いてしまう。

勢いに流されてそのまま雑談を続けそうになったが、手元のチラシが目に入り本来の用事を思い出した。危ない、こんな調子では夜までに配り終えられないぞ、と心の中で活を入れながら、チラシをそつと差し出した。

「これ、博麗神社でなんか、宴会をするみたいなんですけど、その招待チラシです。よかつたら……」

「ああ！ 新顔を揉むやつね！ ちよつと待っててね」

美鈴さんはそういうと、トトトと走って門番の待機所？ の方へ走って行ってしまった。

とかきさつき「新顔を揉むやつ」って言つてたな、やっぱり幻想郷つてパワハラ体質？  
そんなことを考えていると、アツというまに美鈴さんは帰つてきて。

「お嬢様と咲夜さんに内線でおきましたヨ！ ゆつくり歩いて玄関まで向かう、との  
ことでしたけど、待ちます？」

えつ、こういうのつて普通来た側が中に入るんじゃないの？

「あいつの部屋からあいつの歩幅でゆつくり歩いてきたとすると、多分一時間ぐらいかかる  
な。よし董子、次に向かうぞ」

「それでも大丈夫ですよ、お嬢様も『もし玄関で出会えなかつたときは、宴会の時を楽しみ  
にしてるわ。大分愉快そうな子ですもの、こういう出会いは大切にしないといけないわ』と  
のことです。

わあ、すつごい威厳。一体どんな人なんだろう。

頭の中で妄想が膨らんでしまう、お嬢様つて呼ばれるぐらいだからきつととても高貴な感  
じなんだろうな。



「だいたいお前が今考えている事はわかるぜ。その期待感を高めるためにも今はパッパと次に向かうぞ。ほら乗った乗った」

魔理沙さんに襟をむんずとつかまれて、そのまま箒に座らされてしまう。

抗議の声を上げるまもなく、箒はふわりと浮かび上がって思わずバランスを崩しそうになった。というか私も飛べるんだから、本当は箒に乗る必要もないんだけど。

「ご、ごめんなさい美鈴さん！ お礼は宴会の時に！ お嬢様？ にもよろしくお願いします！」  
「はアい！ 宴会の時に一杯酌でもしてくださいネ！ サイツェン 再見！」

挨拶もそこそこに私を乗せた泥船魔理沙号は猛スピードで飛びたつた。真つ赤な館があつという間に小さな豆粒になっていく。

この調子で、あと何件ハシゴすることになるんだろう。それまで起きて、眠つていられるかな、と微妙にピントのずれたことを考えながら、私は流れゆく風景を見つめていた。

そうして次にたどり着いた場所は、遙か上空にある巨大な門（現世と冥界の結界らしい。つてことはこの先はあの世つてこと？）のさらに先にある大きな平屋のお屋敷で、その入り口には一人の剣士？さんが立っていた。

さつきまでの美鈴さんと違って今度は純和風系の美人だ。銀色の髪の毛がさらさらと風に揺れている。

腰には二振りの刀が下げられている。そのうちの片方は彼女の身の丈ほどの巨大な刀だった。デカイ。

そんなことを思いながら眺めていると、彼女はこちらに向かってペコリとお辞儀をして話しかけてきた。

—ようこそ、ここは白玉楼です。主がお待ちしております— そう言うと、また丁寧にお

辞儀をし、お屋敷の中へと入っていく。

「あいつは妖夢っていう半分幽霊の中途半端な奴なんだ。ここの庭師をやってたんだよ」

魔理沙さんが教えてくれた。庭師っていうと普通高枝切りばさみとか持ってそうなものだけだ。

まさかあの刀で庭の手入れをしているわけじゃないよね。

「あれ、というか主が待つてます……って、魔理沙さん事前に連絡とかしてたんです？」

「私がそんなことをすると思うかあ？ 多分レミアアの差し金だよ、さっき言った紅魔館のお嬢様、あいつが咲夜にでも伝えに来させたんだろうさ」

「そんな馬鹿な、魔理沙さん滅茶苦茶ぶつ飛ばしてたじゃないの」

「距離と時間の関係がないやつがここには多いのさ」

テレポーテーションなんだろうか、私だつてちよつとの距離はできるけど、こんな長距離となると…想像がつかなかった。

幻想郷、理解の及ばないことが多すぎる。

そんなことを考えているうちに、目の前の扉が開かれ、中に入るように促された。玄関に入ると、そこには着物姿の綺麗なお姉さんがいた。

ピンク色のショートボブに、整った顔立ち、まるで人形のような印象を受ける。

「よく来たわね。紅いメイドからかくしかじかしているわ」

「初めまして、宇佐見董子です、よろしくお願いします」

「へえ、あなたが。あなたの話は紫から聴いてるわ。トンチキな娘だつて。ふふ」

うぐ、また人づてに知らない私が生まれているのを観測してしまった。

幽々子さんは不思議な包容力のある人で、初対面なのにまるで親戚のおばちゃんとお会つ

たような気持ちになつてしまう。

「あらあ、今この子幽々子のことを『親戚のおばちゃんみたい』つて思つてるわよ」

いきなり私のすぐ後ろ、魔理沙さんと私の中間地点から声がしたと思うと、何とも形容しがたい音とともに紫色のドレスを着た妖艶な女性がぬるりと虚空から滑り出てきた。

「どわあ！！ 紫、おまえ出てくるなら事前に出てくるつて言えよ！ ビックリするじゃんか！」  
「どつきり大成功、ですわ」

あらあらうふふ、とても不味い。何を言つてもスルスル流してしまいそうで、尚且つおしゃべり好きそうな二人に挟まれてしまった。これはまさに後門のタイガー、前門のバッファロー。私の本日の幻想郷巡りはここでゲームオーバーかもしれない、パパママありがとう

「ほらあ、董子がビックリしすぎてフリーズしちゃったじゃないか。おーい」

「前に紫と一緒に見た「じぶり？」の女の子みたいに固まつてるわねえ」

「温泉で働くやつね。確かにちょっと境遇は似てるかもしれないわねえ」

「…ッ！ にて…ないっ！ 名前とられてないし！ おばあちゃんって呼んじやいますよ…!!」

「私は享年未成年ですから」「私は別に構わないわよ」

「はい、はい、はい、多分これこの調子で話が終わらない奴だぞー」

魔理沙さんがしびれを切らして助け舟を出してくれた。

ああ、いけない、この人たちの調子に巻き込まれてしまつてはダメだ。

私のすべきことは、このチラシを配ること。そして宴会に参加すること、この二点なんだから、もつとスマートに過程を済まさないと。

「あの、これ博麗神社でやる宴会のチラシです。霊夢さん曰く主賓は私だそうです。日付は日後。」

「まだまだこの後魔理沙さんと廻るので、お話したいのはやまやまですけど積もる話は宴会の時にでもッ!!」

…正直、かなり無理がある。ゴリ押しもいいところだ

魔理沙さんが「あちゃー」とでもいいいたげな顔で額を抑えている。

まず、数秒経ってから、自分がとてつもなく馬鹿で失礼なことをしたような気持ちが湧いてきた。

会社で言うなら社長を飛び越えて会長に宴会のチラシを突き出しているようなものだ、突き出した腕がプルプルと恥ずかしさと恐怖で震えてくる。頼むからこのチラシを受け取ってくれ…!

と、そんなことを考えていると手からぴつとチラシが抜き取られる感覚がする。

思わず頭を上げると、幽々子さんと紫さんの二人が顔を寄せながら、チラシをじつと見ているところだった。すると、幽々子さんがポツリと

「ねえ、董子ちゃん」

「あつ、は、はい！」

「この宴会、何時開催なのかしら？」

「へ？ そりゃあ……」

あ、私チラシそこまで見てない。

思わず魔理沙さんのほうに顔を向けると、バツが悪そうにポリポリと頬を掻いている。

もしかして、日程が決まってない？

どうしよう、こんな予想外は想定してない。いや想定してないからこそ予想外なんだけど。



「……どうせ霊夢にチラシを押し付けられて『配つてきなさうい』つて言われたクチね？」  
「あ、ああ、そうなんだ。私もいつにしようか今考えてたところだ」  
「全く……」

紫さんがこめかみのところを二本の指でムニムニと揉みながら、うーんと唸っている。

「ねえ魔理沙、このチラシはあとどれぐらい配るつもりだったのかしら？」

「えーっと、後永遠亭だろ、里の顔見知り連中だろ、寺と仙人と、守矢神社と、あと射命丸あたりにおしつけようかなーって思ってたところ」

「どう考えても今日一日では無理ね……」

「そりゃあ……まあ……」

魔理沙さん、あとそんなに連れまわすつもりだったのか。私の睡眠時間的な意味で見ても、到底無理な日程だった。

「うん、董子ちゃん」

紫さんは急に私に向き直る。そしてびしりと私を指さしながら

「二日後、夜の二一時に眠って、そのまま博麗神社に来なさい。」

「そうすれば、貴女は何にも心配もなく宴会に参加することができるわ」

「これは私からのちよつとした親切。貴方と私の縁にかこつけたおせっかいだから、特に気にしなくてもいいからね」

「おいおい紫、どういう風の吹き回しだ？ 新参者にそんなに優しいだなんて、ずるいじゃないか」

魔理沙さんがぶーたれている。私としても、急な手助けの言葉に、ありがたいけれども困

惑してしまふ。

「えっと、なんでまたそんなに急に？」

「妖怪の考えていることは、人間には解り辛いものなのですわ」

「答えになつてませんよお」

「強いて言うなら、未来と過去に絡んだ複雑な縁。ということかしらね」

そのあとも色々と問いただしたかったのだけれど、のらりくらりと躲された挙句、チラシも全部持つていかれてしまった。

魔理沙さんに色々聴いてみたが、彼女からも

「いいじゃあないか、紫からやさしくされるなんて私も初めて見たよ」

「ありがたく受け取っておくべきだろうな、うんうん」

なんて言われて、うやむやに流されてしまった。

なんというか、納得がいかないけど仕方がない。

既にチラシも手元はない。どうすることもできなくなった私は、魔理沙さんと一緒に博麗神社に戻った後、霊夢さんにかくかくしかじかとあらましを話した後、幻想郷から足を離れたのだった。

二日後、夜二一時。

自室のベッドで暖かな布団で眠りについた私は、約束通り幻想郷へとまた降り立っていた。人気のない、博麗神社の鳥居手前の森の中に降り立った私は、手櫛で髪を整えてから神社の境内に目を向けた。

宴会と言っていたから、てつきりお囃子でも流れているのかと思ったけれども、そんなこ

とはなくて。

ただ、薄暗いながらも提灯の明かりが煌々と輝いていて、見知った人々の声がワイワイと響いていた。

「やばっ、ちよつと遅れちゃったかな」

正直、こんなに騒がしいところに混じるのは少し怖い。

でも、「こつちの世界」は、私のいる元の世界とは全く違うんだから。

そう決心して、私は境内の中に目を向け、足を踏み入れた。

そこには――

地獄、地獄といつていい。

うつくしかつたり、可愛らしかつたりするこの幻想郷の少女たちが全員、私の知る限り全員が酔っぱらっている。

顔面を真っ赤にしているもの、端の方で吐いている者、宴会の中心で酒瓶を手に弾幕を放つもの。

これが、私が主賓の「宴会」だというのか、外の世界のうわさに聞くパワハラ宴会とか、そういうものにしかな思えない、見えない。

余りの光景に、思わず一歩後ずさった。

その時、宴会の参加者の一人が勢いよく立ち上がり、高らかに叫んだ。

「おおい！ 董子！ 遅いじゃアないか！！！」

「みんなあ！ 主賓が来たぞーっ！！！！」

妖怪黒魔法使い女、魔理沙さんだ。

逃げたい、全力で逃げたい。

思わず一歩後ろに後ずさった。が、その後ずさった足は地面をとらえることなく、虚空へ

と私の体は落下した。

そのまま、私の体は柔らかな膝の上に着地した。

後ろを振り返ると、心地よさそうに顔を紅く紅葉させている紫さんの顔があった。

宴会の大外から、一瞬で中心へと引きずり込まれる。

周囲には、完全に出来上がった人妖たち、彼女たちはみな、手に酒を握りしめている。

私の盃の中に、お酒が注がれていく。

外の世界の基準で言うならば完全に違法。それはまるで境界越えのように、人をひきつける魔性の液体。

外の世界であっても、コンビニにでも行けば手に入る。とても手軽な境界の向こう側。

私とその液体の透き通る美しさに目を奪われていると、白黒の服を着た、真っ赤な顔をし

た少女が心底楽しそうな笑顔で何かを言っている。

私はこの宴会に足を踏み入れた時、恐怖と共に後ずさった。

でも、この液体を飲むことで、あちら側に行けるのなら。

本当に、一つの境界を超えることができるのなら――

ふと気づくと、周りの人妖たちが水を打ったように静まり返っている。

皆の視線が私と、私の手元にある酒に注がれている。

私は、ふう、と小さく息を吐いて

まるでそれが厳かな儀式であるかのように感じながら。

そっと口づけをして――

ごくり、ごくり、ごくり。



喉を鳴らして、それを嚥下してゆく。

私の喉に、未知の感覚が走る。

まるで喉の中で火花がはじけているかのような。

水のような見た目と裏腹に、暴力的とも形容できる灼熱が暴れている。

咽そうになる。でも、私にだって意地がある。

更に、ごくり、ごくりと喉を鳴らす。

霊夢さんや魔理沙さんが横で眼を見開いている。どうだ、わたしだってやればできー

「あへー」

視界が、廻る。

あれ、これ、なんだ

「ああ、こりゃ不味い」

「咲夜あ、水持ってきてくれー」

魔理沙さんや、霊夢さんが何かいってー

これをおみきつて、もつとみんなといろいろはなしを

どしや

急に地面が立ち上がって、私は地面に立つことができなくなつて

世界がぐるぐるまわつて、私は、ふらふらと、がくがくと振える足で、立ち上がって

――  
気付けば、私はベッドから落ちていて。

頭がずきずきと痛む。私は、夢の中で：幻想郷で何をしたのか。

向こう側について、紫さんの膝に着地したことまでは覚えてる。

思い出そうとすると、全てがぼやけて、無限のかなたに消え去ってしまう。

頬に冷汗が伝う。

とりあえず、次に彼女たちと出会ったときに謝ろう。

そして、何かやらかしてなかったか確認しよう。

肉体にアルコールは残っていないのに、魂の側にだけ二日酔いの症状が出ている、奇妙な頭痛をかみしめながら、彼女は一人決心したのだった。

その後、彼女が宴会の度に飲み潰れて「寝起き」するのは、また別のお話――了――



近藤貴弥

春雷

ある春のことである。微かに降ってくる雨音に気づいた稗田阿求は役目となっている幻想郷縁起の編纂の手を止めた。随分と長い時間、書齋に籠っていたようだ。空気を入れ換えるように襖を開け、机に置いていた鈴を鳴らし下女を呼び、新しい紅茶を用意するように命じる。

阿求は書齋に戻り、編纂途中の幻想郷縁起を眺めながらこう考えた。

里の人間は、どうも書物を読む傾向にない。幻想郷縁起は稗田の仕事として代々編纂を繰り返しているが、どうも読まれているような気がしない。文章のみでは理解が難しいのだろうかと思つて、絵を添えたりしてみるが、爆発的に読まれるようになった、というわけではない。

小鈴の所に置かれているのは何度も見ているが、何度も見ているということは、あまり読まれていないということだろう。

小鈴からも、つまらない、と言われたことがある。阿求としては、歴史を学ぶことに意味があり、そこに面白さやつまらなさは関係ないと思つている。

寺子屋で聞く授業と同じようなものだ、とすら評された覚えがある。

自分ならば彼女よりも面白い授業をする自信があった。そんな彼女と同程度のものを書いていくなど思いもなかった。

阿求は自らが編纂を続ける幻想郷縁起を面白いと思っている。しかしもしかすればこの面白さは、阿求だけが感じているものだけの可能性は大いに有り得るのではないだろうか。事実、小鈴からはつまらないという評価を受けている。

幻想郷縁起は御阿礼の子としての唯一の義務であり、幻想郷で起きたことの記録でもある。その記録が、つまらないということは、幻想郷がつまらないということではないだろうか。記録に面白さは不要だと思っているのだが、面白くないがために読まれないのはおかしなことだと思う。知識を深める、見識を広げるために読む書物に、面白さというものは必要なのだろうか。

古今東西の書籍を繙いても、そういう書籍は堅い。争いの記録だったり、侵略の記録だったり、政の記録だったり、生き方のことであつたり……。

紅茶を持ってきた女に、阿求は何か面白いことはないか、と尋ねた。女は、はあ……と言つた後で、特には……と答えるだけだった。

そうですか、と答えようとした時、阿求はこの女が家事の片手間に本を読んでいることが多いことを思い出した。屋敷にはない本で、小鈴の所から借りているらしく、少し大きな本だった。手で持つには重いようで、食卓のちゃぶ台に置いて読んでいる。

阿求はその少し大きな本について尋ねた。すると、やはり小鈴の所で借りた本であり、小説と呼ばれる類のものらしい。

女がそんな類の物を読むと思つていなかったので驚きと興味が生じ、どういふ小説なのかと尋ねた。すると、猫が主人公の小説だと教えられた。堪らず、猫の？と訊き返す。女に命じて、その小説を持ってきてもらい中身を確認する。確かに、猫が最初に描かれ、物語は進む。吾輩と言う猫を中心に……。

阿求はその小説を読んだ時、落語を思い出した。寄席に足を運び、噺家の落語を聞いていた。



阿求は小説についてはよく分からなかった。しかし、この女が読む落語の形を保った小説は新しく、面白いと思える。

この小説と比べると、阿求が編纂を続ける幻想郷縁起は面白くないものだろう。こういう小説から本を読むことに親しみを持ってもらえれば、幻想郷縁起は今よりも多くの者に読まれるのではないだろうか。

阿求は紅茶を片手に女の借りた猫の小説をすぐに読み、書齋へと戻った。

編纂途中の幻想郷縁起を机から動かし、真新しい紙と向き合う。筆を執って、小説を書くうと試みる。言葉は浮かぶのだが、その言葉をどう扱えばいいのか分からない。

記憶を頼りに寄席で聞いた語りを書き進めようとするが、どうも印象と離れる。話し言葉を書き言葉に落とし込もうとした時、その声の調子までを書くことができなかつた。

女の読む猫の小説は、一読して落語の雰囲気想起させるので自分もできるだろうと思つたのだが、そういうわけにはいかなかつた。

面白いことは頭に沢山あるはずなのに、言葉に、小説に書き起こしてみようとすると途端

に形を失い、しぼむ。

幻想郷縁起の編纂を続けてきたので人よりは物を書くことに慣れているため、その自信はそっくりそのまま小説を書けるだろうという自信に繋がっていたのだが、どうやら小説というのはそう簡単に書けるものではないようだ。

屋敷にある資料を思い返しても、それは編纂に用いる資料であったり草案ばかりで、それらはどれも記録だった。あるいは、日記と呼んでもいいかもしれないものだった。小説は、なかった。

窓の向こうから雨音が聞こえなくなっていた。雨はいつの間にか上がっていたらしい。けれども、窓の先に広がる雲はいずれも重たく暗い影を里へと落としており、今すぐにでも再び雨が降り出しそうな気配を帯びていた。

阿求は書齋に女を呼びつけ、鈴奈庵で小説を何冊か借りてくるように命じた。

女の借りてきた小説は、いずれもが落語のような、あるいは勧善懲悪な物語だったり、異国の出来事に影響を受けた物語だったりした。面白いかと問われると面白いのだが、どこか

古臭い感じの芝居を見たような気にさせるばかり。観劇したものを書き言葉に置き換えてい  
るような印象だった。

これならば書けるだろうと阿求は思ったが、雨が続くこの時期に貸本屋に残っている小説  
ということは、他の小説より面白くないのではないだろうか。あるいは、人気がないのでは  
ないだろうか。

そういう小説を、阿求が改めて書いたところで一体果たして何になるのだろうか。

女に借りてきた本の感想を尋ねてみると、やはり阿求が思っていた通り、面白いのは確か  
なのだが他の小説より優先して読むほどではない、との評。

となると、女の読んでいた猫の話のような新しい何か、が必要になる。しかし阿求には、  
その新しい何かが全然思い浮かばない。

雨はまた降り始めた。雨音を遮るように、阿求はレコードをかけた。紅茶を片手に、思索  
に耽る。小説を書く糸口を、きっかけを見つけようと試みる。

小説を書きたい理由はあるが、書ける話がなく、どう書けばいいかも分からない。

そうして考えていると、いつの間にか眠っていたようで、蓄音機から流れていたピアノの音は止まっており、雨のか細い音だけが書齋に満ちていた。

遠くで雷が鳴った。

阿求を眠りから目覚めさせたのは、どうやらこの春雷のようだ。

小説をどう書くか、ということを見る直前まで考えていたことを、寝起きの頭でも考えてしまう。悩むばかりだろうと思っていたが、解決の糸口が見えた。

阿求は多くの書物を読み、その一切の文章を記憶している。それらの文章を一つずつ組み合わせれば、新しい小説になるのではないだろうか。完璧に新しすぎることとはなく、あの猫の小説のような、どこかが見聞きした気がする、どこか懐かしさを覚える小説というのが出来るのではないだろうか。

そのことに気づいた時、阿求は自身が雷に打たれたような衝撃を覚えた。

それから阿求は、自身の考える小説の下地となる話を探し始めた。多くの物語は神話を元にしていて、とどこかで見た覚えがある。神話の物語を小説の下地にすれば、多くの小説か

ら話を引つ張つてきても、荒唐無稽になるようなことはないだろう。多くの人間に語り継がれた物語として、神話の物語は確かな強度を有していた。

神話を元にするが、このまま書いてしまえば神話の焼き回しになる。それは避けたい。神話を物語の下地にするということは考えたが、神話の何を下地にするかまでは決めてなかった。物語の流れを採用してしまえば、阿求は今し方考えたような、神話の焼き直しになってしまう。それではいけない。

となると、他の部分も採用したい。神話の語りは、あまりに古く今の人間達が読むには難解である。それもいけない。登場人物はあまりに昔であり、阿求が資料として読んだ小説と同じような思いを懐かれる可能性が高い。すなわち、古く昔であり、面白くないというやつだ。神話から借りるのは、話の筋だけにしよう。そう考えたが、この話の筋は、物語の流れと同じような気もするし違うような気もする。阿求はまた記録を探り、数多の神話を思い出した。それらの神話には、ある共通点があることに気づいた。物語の骨格とでも表現できようか。どこかへ行き、帰ってくる。

阿求は神話に共通しているその要素を元に、小説の物語を構築した。阿求はその、どこかへ行き、帰ってくるという要素を眺めて、まるで自分の取材の時のようだ、と思った。

人里の外で人間が生活するのは難しい。幾つかの例外は知っているが、例外である。彼女達は妖怪と戦う術を有している。多くの人間は、そういう術を有していない。

阿求も妖怪に対する知識はあり、対策を講じることはできるが、実戦の経験はない。妖怪から逃げるとなれば、きつと不可能であろう。妖怪と相対するとなれば、否が応でも緊張する。その場を上手く切り抜けなれば、阿求の生命は脅かされてしまうのだから。

阿求達人間は、そういう世界で暮らしている。そして、阿求は、そういう世界を記録するために、人里を出て、記録をするために人里に帰って来なければならぬ。

二度目の雷が落ちたのは、この瞬間であった。

阿求は幻想郷縁起の編纂で最も大変だったことを思い出した。妖怪の住む所に足を運び、話を聞きに行き、帰って記録する。

その日々を、一つの小説にまとめた。自身の体験を元にするため、書くのは難しくない。

すぐに一つ目の話は書き上がり、二つ目、三つ目と小説は書き上がった。

阿求の小説は一つ、また一つと書かれ、梅雨を迎える頃には一冊の本としてまとめられるほどだった。阿求は小説家として、自身の腕前が上がっていく実感を覚えた。

人里で何者かの書いた推理小説が人気を博し、読まれるようになったのはもう少し先のことであった。〈了〉







この度は、東方はじめて合同「春雷」を手に取っていただき、まことにありがとうございます。今年の五月頃に勢いでツイプラで参加者の皆様を募集し、頒布に至ることができ、一安心しております。

この合同誌は、小説でサークル参加されたことのない、これまで合同誌にも寄稿されたことがない書き手の方の小説を集めた合同誌となっております。普段、出藍文庫が頒布している文学系の合同誌とは全然違ったものになっていると思われれます。楽しんでいただけましたら幸いです。

表紙を承ってくださいました石川スペアリブ氏に感謝を申し上げます。

誤字脱字の確認を承ってくださいましたシンリ氏・ひととせ氏にも重ねて感謝を。

この合同誌の後書きを書いている頃は、九月上旬です。もつと具体的に書きますと、明後日に京都合同が開催される時分です。京都秘封にサークル参加するの初めてですし、京都秘封が終わっても、翌月には紅楼夢があり、それでも合同誌を主催し頒布しており、その二週

間後には秋季例大祭。怒涛のスケジュールです。後書きを書いておりますが、もう不安で仕方ありません。

五月に寄稿者の皆様を募集した段階から、忙しくなるだろう、大変になるだろうというのは分かっていたのですが、想像を絶するものでした。連絡や確認事項の頻度ややり取りが多く、誰に何の連絡をしたのか・していないのか、次にどういふ連絡をするのか……という確認作業を漏れなく行う、確認の確認を行う作業が必要でした。

春季例大祭に参加するために英気を養おうと思えます。無茶のスケジュールを立てると後々で大変になり、少し長い休養を設ける必要があるなあ……という次第です。

出藍文庫の次のサークル参加は、おそらくは来年の春季例大祭だと思われれます。その時にまた皆様にお会いできましたらこの上ない幸せでございます。

二〇二二年九月上旬 近藤貴弥

とうほう                      ごうどう      しゅんらい  
東方はじめて合同「春雷」

---

2022年10月23日 初版

原作 東方 Project (上海アリス幻楽団)

印刷 ちよ古っ都製本工房

発行者 こんどうたかや      しゅつらんぶんこ  
近藤貴弥 (出藍文庫)

表紙絵 石川スペアリブ (骨付きフリル)

ロゴデザイン 工藤雅弘

寄稿者

children

如月

七曜主醬

荻窪ミナミ

霜月レイ

あらざり

---